

雨宿り

葉山ほずみ

最期の願いほど断りにくいものはない。

それが例え、血縁だけで繋がっていた父方の祖母からのものだとしても。

「あと一か月で終わりなのよ、私の命」

電話をしてきた祖母はそう言っ、顔を見に来るように、と電話を切った。

京香にとって祖母は遠くの親戚というより、遠くの他人に近かった。最後に会ったのは京香の両親の葬儀のときから五年以上前だ。祖母に会いにいかなくても、誰も京香を責めはしないだろう。そもそも祖母が京香を呼ぶ理由もわからない。

だから、会いに行こうと思った。

祖母と孫らしい関係もなかったのに、人生を終える間際に呼び出した理由が知りたかった。

祖母は入院していた。ベッドに寝たままで天井を見つめ、力のない声でぼつりぼつりと言葉を紡いでいた。それは静かな病室でも耳をかたむけないと拾えない音だった。

京香は黙ったまま祖母の口から出てくる言葉を聞き続けた。

それは京香にとっていまさらだと思わないこともなかった。あなたは小さいころからかわいくない子どもだった、と言われたときは、あなたはとても意地悪だったね、と心のなかだけで言い返した。

母方の祖父と父方の祖父は京香が生まれたときには他

界していたから、この祖母だけが孫として接した唯一の人だった。世間の祖父母が孫を可愛がる姿を見るたびに、自分がそれに当てはまっていないことに居心地が悪い気持ちになった。

それでも、京香にとって祖母の記憶というのは痩せ細ってベッドの上でかすれた声を絞り出している目の前にいる姿ではなく、子どもの頃の夏休みに数日だけ一緒に過ごしたときのものだった。

京香が寝ている横でパジャマを縫い、暑い昼間に手を引いて一緒に買い物に出かけた。

一週間にも満たないたった数日の祖母との思い出としても、簡単に忘れることなどできないのだな、と頭を掻いて軽く息を吐き出した。

祖母は京香の帰り際に折りたたんだ紙片を渡した。芯を失ったような声からは考えられないほどの力で、祖母はその紙を受け取った京香の手を握りしめた。渡された紙片を聞く。力の入らなくなった手で書いた震える文字をそっと指先でなぞった。

そこには祖母の最期の願いが書かれていた。

祖母が亡くなってすぐに、清高は京香の家に小さなスーツケース一つでやってきた。

秋雨前線が停滞していたところで、細く降り続く雨に濡れ

たまま玄関に立っていた彼は、京香がスーツケースを手を持ち家へ迎え入れるとホッとしたように表情を緩めた。

「引き取ってくださってありがとうございます」

家に入る前に清高は背中を伸ばしたままで深く頭を下げた。それはやつと十三歳になったばかりの子どもがするよくな礼ではなく、京香は目を細めて前に立つ少年を見つめた。

清高は京香の従弟、翔馬の息子だった。

一つ年下の彼とは祖母と同様に、ほとんど付き合いもなかった。翔馬は京香の父の妹、美代子叔母さんの息子で、子どものころに何度か顔を合わせた。父の田舎へ行ったとき、大人たちがなにかを話し合う間、京香は翔馬と遊んで過ごした。大人しく、色が白くて目の大きい子だった。

翔馬が高校を中退して結婚したと聞いたのは、清高が生まれた後だった。年賀状程度の付き合いすらもなかったし、相手が十六歳の高校生だったとか、男の子が生まれたと聞いたときも、何の感情も浮かばなかった。

それから二年ほど経った頃、京香の父は親族が集まる実家へ行った。実家と折り合いが悪かった人だったから、印象に残っている。

次の日に帰ってきた父は疲れ切っていた。

翔馬の嫁が近所のモールに買い物に行ったまま行方不明になったということだった。最悪なのは、自分の息子であ

る二歳にもならない清高をその場に置き去りにしたことだ。彼女は清高をフードコートのイスに座らせ、そのまま姿を消した。そして、後日、離婚届が郵送で届いた。両親がなく祖父に育てられた彼女は、そのままどこかへ行ってしまった。彼女の祖父もなにも知らされていないようだった。

翔馬独りでは子育てが難しい、けれど、彼の両親である叔母夫婦は二人が家に戻ってくることを強く拒んだ。元々、この結婚には反対していたし、清高を施設に入れてまだ二十歳になったばかりの翔馬に人生をやり直してほしい。それが叔母夫婦の希望だった。

要するに、息子は戻ってきてもいいけれど、憎い女の息子である孫は不要というわけだ。

翔馬はそれを受け入れず、清高と姿を消した。そして、その一年後、独り暮らしをしていた祖母の家に清高を連れてきて預けると、そのままふらりと出ていった。翔馬の消息はすぐにはわからなかった。身元不明の遺体が従弟の翔馬のものだとわかるまで、しばらくかかった。

山の中で首を吊っていた遺体は損傷が激しく、葬儀では小さな骨壺が祭壇に置かれていた。

京香も出席した翔馬の葬儀で、憔悴しきった叔母夫婦は近づいてきた清高を睨みつけると、叩き倒した。京香たちが止める間もなかった。壊れたように泣き出した清高に、

清高が家に来てから半年が過ぎた。

彼は礼儀正しく、よく家のことを手伝う少年だった。祖母を手伝っていたからか、彼は食事の用意も掃除もできた。「今日は遅くなるから先に寝てなさい」

朝食を二人で食べながら、京香はタブレットを取り出しスケジュールを確認する。清高はまだ声変わり前の高い声で、はい、と元気に返事をした。

「日曜日なのに出勤ですか？」

清高の問いに食パンを口に入れたまま頷いた。呑み込んでから口を開く。

「年度末の棚卸があるんだ。薬局じゅうの薬の在庫を調べろし、九月の棚卸とは違って来月の薬価改定に合わせたシステムの變更もあるから時間がかかる」

京香は両親が営んでいた調剤薬局を引き継ぎ、そこで薬剤師として働いていた。

「昨日、電話があったご両親の法事はどうしましょうか。今日、僕から返事しておきましょうか」

清高は少し言いくそように、手に持っていたカップをテーブルの上に戻した。

京香の両親が車の事故に巻き込まれて亡くなってから六年が経とうとしていた。来月の命日で七回忌になる。薬学部を卒業して他県の調剤薬局で働いていた京香はそれをき

美代子叔母さんは思いつく限りの呪いの言葉を叫んでいるようだった。

「あんたさえ生まれて来なければこんなことにならなかったのよ！」

叔母は何度も何度も同じことを叫んだ。京香の父が清高を背中に庇うように彼女の前に立つたときはテーブルの上に置かれていた湯呑を茶たくごと投げつけた。清高は泣き声をさらに大きくし、その声をかき消すように美代子叔母さんは叫び続けた。そのなかで清高を抱き上げ部屋から出ていったのが叔母だ。

京香は翔馬の葬儀から今日まで清高には一度も会っていなかった。

背筋を伸ばし目の前に立つ少年を見て、よくここまで育つたものだと思う。真っ黒で少し癖のある髪と大きな目は、京香の記憶に残っている数少ない翔馬との思い出を呼び起こした。

育て親だった祖母の葬儀にさえ、美代子叔母さんは清高が出席することを拒んだ。葬儀の間に自分の荷物をまとめてここへやってきた。おそらく祖母は自分が死んだあと清高がどうするべきか、ということを彼に言い聞かせていたのだと思う。

二歳で母親に捨てられ、三歳で父親は自殺した。祖母はどんな思いでこの子を見ていたのだろう。

っかけに実家へ戻り、両親がやっていた薬局で働くことにした。とはいえ、実地経験が一年ほどしかない小娘がオーナーになるということに不安を感じるのとは当たり前で、勤めてくれていた薬剤師の半分は将来性を考えて辞めていった。

残った数人の薬剤師には感謝してもしきれない。両親を一度に失い、杳然としていた京香が立ち上がるまで両親の薬局を守ってくれたのは彼らだった。

「そうか。もう、そんな時期になるんだね。法事と言っても私独りで寺に行つて法要をしてもらうだけだから、大事にはならないよ」

京香の言葉に清高はホツとしたような顔をした。叔母夫婦が来ることを心配していたのかもしれない。翔馬の葬儀のときに叔母に罵倒された小さな子どもだった彼は、祖母と暮らしていた十年で自分が祖父の元にはいるのではなく、曾祖母に育てられていることの理由を尋ね、答えを知ったのかもしれない。

「今年は清高も一緒に来てくれるかな。もちろん、いやだったらかまわないんだ。無理にとは言わない」

京香がそう言うと、清高は「はい、もちろんです」と嬉しそうに目を細めた。

「僕も京香さんのご両親にご挨拶しておきたかったから」彼は照れくさそうに笑った。

調剤薬局の棚卸ほど、面積の割に手間のかかるものもないのではないかと思う。京香の調剤薬局は近くに総合病院があるから、処方する薬の数も多い。常備しているものだけで一五〇〇種類ほどあるのだ。それを一錠ずつ数えるのは当たり前として、その数が合わなければ処方箋を前の棚卸まで遡って、数合わせのカルタ取りをしなければいけない。過不足が多く出た場合、処方ミスも考えられる。数年前の棚卸で、二五mgと五〇mgの錠剤を間違えて処方していたミスが見つかったことがあった。そのときの薬はたまたま症状が劇的に悪化するようなものではなかったから良かったものの、体の芯から冷たさが這い上がってきた感覚はいまでも沁みついて離れない。

「養いっ子は最近どうなの」

棚卸の手を止めず、隣りに立っている薬剤師の香奈江は京香に話しかけた。香奈江は両親がこの調剤薬局を開局して以来、ずっとここで働いている古株であり、京香の子どもの時代を知る人でもある。両親が生きていたら、彼女のように歳を重ねていただろうか。そんなことを考えながら、老眼鏡をかけて小さな錠剤の文字を確認している姿を少しだけ眺めた。

「どうって、いい子ですよ。礼儀正しく家の手伝いをし

るような気もするのよね。娘のところの孫と息子のところの孫とではやっぱりちよつと違うのよ」

娘の孫にはいい意味でも悪い意味でも遠慮がない、と言った。息子の孫はどうしてもどこか距離があるようだ。もちろん、両方ともかわいいことには違いないのだからうけれど。

「さすがにあからさまなことはしないし態度に出ないように気を付けてはいるけれど、両方の孫が揃うとどうしても娘の方の孫に手をかけてしまうのよ」

香奈江は老眼鏡をかけ直し、また手元の錠剤を眺め始めた。

そのあとは香奈江の友だちに孫がかわいくないという人がいるという話を聞いた。その人は孫を見ると可愛げのない嫁が重なるらしく、その人の夫が孫を溺愛しているのを見ると余計にムカついて孫がかわいく思えないと言っていたと話した。

「私ばかりではない孫だったと思いますよ。祖母には懐かなかつたし、会った回数自体、世間の祖母と孫からは程遠いですから。だけど、清高のことはいい子に育てたなと」

祖母は厳しかったけれど、美代子叔母さんの産んだ翔馬のことは溺愛していた。その子どもの清高をただ理由もなく引き取ったとは思えない。祖母は清高を翔馬のようにし

言いながらも、京香は清高に会って以来、彼の態度がまったく変わっていないことを気にしていた。それが良いことなのか、そうでないのかすら京香にはわからない。

「あのお姑さんのことだから厳しく育てたんでしょね」
香奈江は京香の母の親友と呼べる存在だった。だから、うちの事情には京香以上に詳しい面がある。祖母は香奈江が言うように厳しい人だった。厳しいというよりは意地が悪かったという方が近いのかもしれない。ことあるごとに母とは対立していたらしい。その辺のことは京香より愚痴を聞かされていた香奈江の方が詳しいだろう。

「私に対しては厳しかったですね、確かに」

祖母はたった二人の孫をこれでもかというほど区別した。京香の前で、私の孫は娘の産んだ翔馬だけ、と言ったときは優しくした父が本気で怒ったくらいだ。そういうことを平気で言う人だった。

「孫って普通かわいいものなんですよね？」

京香が香奈江を見ると、彼女はため息をついて作業の手を止めた。

「そりゃかわいいわよ。かわいがるだけでいいんだもの。怒らなくていいってすごく楽よ」

香奈江には京香と同一年の息子とその三つ下に娘がいる。両方とも結婚して孫もそれぞれに産まれていた。

「だけど、あの厳しいお姑さんの気持ちがちよつとは分か

たくなくて、礼儀や家事などを教え込んだのではないだろうか。

「まだ一緒に暮らして半ปีですから清高にも遠慮があるのかもしれないです」

清高が礼儀正しく、年相応の子どもっぽさを持っていないことを気にしていた京香は自分に言い聞かせるようにそう言った。

「遠慮ねえ……あなたはちよつと愛想がないっていうか言葉が足りないことがあるから」

「言葉が足りないですか」

そう繰り返すと、香奈江はかけていた老眼鏡をすらして京香へ顔を向けた。

「人なんて言われなきやわからないの。何十年も一緒に暮らしている旦那のことだつてわからないのに、急に現れた親戚の子があなたの心情を汲み取れるわけがないのよ。だいたい、十三やそこらの子が礼儀正しいわけじゃない。うちの息子がそれぐらいのときなんて、勝手に家に上がりこむ近所の野良猫の方がまだ礼儀つてもものを理解していたわね」

香奈江は鼻から大袈裟なほど息を吐き出して、肩をすくめた。

半年前の雨の日に玄関にぼつりと立っていた清高の姿が頭に浮かんだ。彼が祖母と暮らしていた家から持ってきた

ものはわずかだった。伸び盛りの身長で少し丈の短くなった衣服や、丁寧に使いこまれた文房具。彼は自分が持ち出して良い物はそれだけだと思っていたのだろうか。彼にとっては祖母との十年間すら、自分の居場所だと思えなかったのだろうか。

まだほんの子どもである清高がそこまで考えていたかどうかはわからない。けれど、子どもだからこそ、本能的にそれを覚っていたのかもしれない。

清高にとって京香との暮らしもそうなのかもしれない。その考えが頭の中の深い部分に染み込んでいった。

清高が家に来てから一年半が過ぎた。

この春から彼は中学三年生になる。この家に来たころは、京香が彼を見るときは視線を下げていたけれど、今はもうその必要もなくなった。キツチンに立って朝食の準備をする背がまた少し伸びた後姿を見て、春休みのあいだに制服の裾直しに連れて行く日を頭の中ですばやく選んだ。

「春休みのあいだに塾も決めておかなくてはね」

朝刊の間に挟まれていた塾の広告を見ながら、何気なく京香は呟いたつもりだった。けれど、清高は飛び上がるほど驚いていた。

「塾は嫌か？ じゃあ、家庭教師はどうだ」

朝食を運んで向かいに座った清高に、塾と家庭教師の広

告を見せる。清高は困ったようにそれを受け取り、見ずにテーブルの上に置いた。

「……中学を卒業したら働こうと思っています」

今度は京香が驚く番だった。

「清高は成績もいいだろう？ 高校へは行きたくないのか？」

京香は目の前で肩を小さくしている清高を見る。清高は言いくそように、なんどか口を動かした後、やっと声を出した。

「京香さんにそこまでお世話になるわけにはいきません。寮のある仕事を学校から紹介してもらえないか、お願いするつもりでいます」

唇を噛んで顔を上げた清高を見て、京香は頭を後ろに倒して大きなため息をついた。

香奈江に「言葉が足りない」と言われていたのは、きっと、こういうことだったのだろう。

京香が清高と同じ年齢のときには両親がいて、高校へ行くのが当たり前だった。行かないという選択肢もなかった。そのことを両親に感謝することもなかったし、お世話になっているという概念もなかった。それは親子だからなのだ。そんな当たり前のことを見落としていた自分に腹が立つ。

「私が悪い。ちゃんと話をしておくべきだった。すまない」

目の前の礼儀正しい少年は、まだ十五歳にも届いていないのだ。清高の置かれた環境が、彼を聞き分けのいい年齢に似合わない子どもにしてしまっただけなのに。この子のなかに、進学という選択肢を置くのは京香がするべきことだったのだ。

「私はお前の保護者だよ。清高を高校だって行かせるつもりだし、こう見えても大学にだって通わせるだけの甲斐性ぐらいある」

薬剤師は高給取りだぞ、と付け足すと、清高は力が抜けたように笑った。笑い顔を作ろうとして失敗したみたいに眉が下がって泣きそうに見えた。

「それにな、お前が住んでいたばあちゃんの家があったら？ ばあちゃんに頼まれていたから、あの家売ったんだ。その金を叔母と私とでキツチン半分に分けた。一円の単位まで分けたんだ。ばあちゃんからその金を清高に使って欲しいと頼まれていたんだよ」

祖母が亡くなる前に書いた紙片には、家の処分と叔母との遺産分けの配分も書いてあった。祖母は清高にすべてを遺してやりたかったのだと思う。けれど、正式な遺言状もない状態では法的に相続の権利があるのは叔母と、父の娘である京香だけだ。たとえ遺言状を遺して全額を清高に遺したとしても、叔母は清高に一円たりとも渡したくないはずだ。法定相続分を裁判で取り戻すぐらいはやる。清高が

どう思われているか知っている祖母なら、叔母がどんな行動を取り、清高をどれだけ傷つけるかを理解していただろう。だから、京香に清高の分を託したのだ。

「お前に家を買ったことを黙っていたのは本当にすまないと思ってる。ちゃんと話さなくちゃって思っていたんだけど、清高にとってあの家がどういった存在なのかと考え出すと、なかなか口が重くなってしまっただけ」

どうしたら清高に伝わるだろう。そんなことを思いながら必死にしゃべっていた京香は自分が忙しなく両手を大きく動かしていることに気が付いた。

そうか。誰かに理解してもらいたくて必死になるとき、自分はこんな状態になるんだ。

京香は知らなかった自分の一面を発見し、我慢できずに喉を詰まらせたような笑い声を出してしまった。誰かに何かを伝えるために必死になったことがなかったことに、三十を過ぎて気が付くとは思わなかった。

訝しげに京香の顔を覗き込む清高に、すまない、とにやける口元を隠した。

「お前といるようになってから自分の知らなかった面が見えてきてね。それがどうやら心地いらしい」

京香はそう言ったあとで、手を伸ばして目の前に座る少年の、懐かしい面影を持つ癖のある黒い髪をゴシゴシと乱暴に撫でた。

「そんな急いで大人になるなよ。もう少しぐらい私に保護者ヅラさせてくれてもいいんじゃないか?」
清高は撫でられて乱れた髪を撫でつけながら少しだけ俯いて、それから拗ねたように横を向いた。
「……僕ばっかり得してるじゃないですか。何なんですか、もう」

そう言ったとき、清高はテーブルに突っ伏して顔を見せてはくれなかった。だから、さつきより少しだけ優しく頭を撫でて、「いってくる」と仕事へ向かった。

清高が来てから二年半が過ぎた。

彼は中学を卒業し無事に志望校に合格した。この春、彼は高校生になる。

清高は昨日、届いたばかりの高校の制服を着て少し照れながら京香の前で「ちよつと大きいでしょうか」と笑った。まだまだ背が伸びそうだからちよつと大きい、京香がそう言うのと納得したような顔をしていた。

「僕が出ます」

玄関のチャイムの音に、簾の糸が付いたままの制服姿の清高はインターホンの画面を見ながら首を傾げていた。

「京香さん、知らない男の人がいます」

京香はソファから立ち上がり清高の横に立って小さな画面をのぞき込んだ。

「清高もこつちへ来て座りなさい」

京香が呼ぶと、清高は叔父と向かい合って座った。

「この人は清高のおじいさんだよ」

京香の言葉に、清高はなにか苦いものでも食べた時のような顔をした。

叔父はそんな彼を困ったような顔をして見つめ、大きくなったね、と呟いた。

「あなたがここにいることを美代子叔母さんは知ってるんですか?」

京香が尋ねると叔父は「まさか」と首を振った。

叔母はまだ清高のことを恨んでいるのだろうか。ふとそう思ったけれど、清高にその話は聞かせたくない。黙ったまましていると叔父は一通の手紙を取り出してテーブルの上に置いた。

「翔馬が……息子が最期に私たちに残した手紙だよ」

年月が経っているからか読んだときに叔母が握りつぶしたのか、しわだらけの紙はずいぶんと傷んで見えた。

「私たちは翔馬と君が家に戻ってくることを拒んだんだ。拒まれても息子はすぐに私たちに助けを求めてくると思っ

ていたんだ」

謝ってきたらそのときは許すつもりだったと言った。叔父は自分たちが一人息子の翔馬をどれだけ大切に育ててきたかを語った。

「清高、部屋に戻って制服を着替えてきなさい」

京香はそう言ってその場に清高を残し玄関へ向かう。いまさら何をしにここへやってきたんだ。

玄関のドアを開け、腕を組んでまっすぐに来客を見据えた。

「お久しぶりですね、叔父さん」

自分がどんな顔をしていたのかはわからない。けれど、歓迎していないのは伝わったようで目の前に立つ白髪交じりの髪を撫でつけている叔父は困ったように会釈をした。

「ちよつと上がらせてもらっても構わないかな」

「上がるんですか?」

京香が言葉を被せると、家のなかに入ろうとしていた叔父はぎよつとしたような顔を隠しめせず戸惑って動きを止めた。

まさか断られると思わなかったのだろう。叔父はそういう人だった。いつも空気みたいに存在感がなかった。叔母の影に隠れて印象は強くない。

「京香さん、お茶の用意をしましょうか」

後ろから遠慮がちに聞こえる清高の声に叔父はあからさまにホッとした顔をした。舌打ちをしたくなるのを堪え、

「どうぞ」と叔父を家に入れた。

リビングのソファに座った叔父は制服を着替え終えた清高が淹れたお茶を飲んだ。

けれど、翔馬は助けを求めなかった。自分の親ではなく祖母に清高を託し、命を絶った。

「その手紙には自殺を選んだ理由が書かれてある。あの子は疲れ果てていたようだね。高校生同士で恋をして子どもを授かり、環境も整っていないなかでままごとみたいな生活を始めただ」

その生活はすぐに破綻した。翔馬の相手には親がいなかった。祖母に育てられた彼女は家を出たくて結婚したようなものだったと叔父は説明した。

「翔馬にもその相手にも家庭を作り上げる覚悟がなかったんだよ」

なんで助けてやらなかったんだと叔母夫婦をいまさら責める気にもならなかった。彼らは翔馬がすぐに縋り付いてくると思っていたのだろう。彼は覚悟がなかったわけではないのではないかと思う。

叔父は覚悟がなかったから翔馬は死ぬことを選択し、相手は子どもを捨てて逃げることを選んだと思っっているのだらうけれど、違う気がする。

彼は覚悟があったからこそ自分の命を引き換えに、清高のことを祖母に託したのではないだろうか。祖母が自分の寿命を盾に取り、京香を呼び出して清高を託したことと似ていると思っただ。

「そこまで翔馬が大切ならどうしてその子どもの清高を引

き取ろうとしなかったんですか」
京香はずっと疑問に思っていたことを口に出した。清高が視界の端で体を硬くしているのに気が付いていた。けれど、これは彼も聞いておくべきことだと思ったのだ。

「その方が簡単だからだよ」

叔父は悪びれずにそう言った。

「自分たちの態度が翔馬を死に追いやったことは十分にわかっているつもりだ。その上で私たちは愚かにも楽な方法を選んだんだよ。自分の過ちを認めるより自分以外の誰かを責める方が簡単だからね」

叔父は自分を嘲笑うかのように口の端を吊り上げていた。

「そして、それはまだ続いているんだ」

叔父は目を閉じて息を吐き出した。

叔父も叔母も清高を責めることで自分たちの安寧を確保したに過ぎない。なんて身勝手に愚かなのだろう。けれど、息子を失った親が正気を保つために取った行動を責めることなど京香にはできない。それを責める資格があるのは清高だけだ。だけど――。

「清高、部屋に戻りなさい」

京香は静かにそう言った。

叔父は清高に責められることで自分の罪悪感から逃れたいのではないだろうか。そんな役回りを清高にさせるつもりはない。彼はこれ以上なにかを抱えるべき年齢ではない。

京香はため息をつき眼差しを向けた。

額に冷えピタを貼り、バジヤマの上からカーデイガンを羽織ったマスク姿の彼はゴホゴホと咳き込んだ。

清高が来て初めての発熱だった。医者からインフルエンザじゃなくただの風邪でしょうと言われてホッとした。

「京香さん、仕事じゃないんですか」

ベッドで半身を起こして、かすれた声を出す清高の髪をくしゃくしゃと撫でる。

「薬局で他人に薬を処方するのは薬剤師だったら誰にでもできるけど、寝込んだ清高の世話は私だけの特権だから。仕事なんて休みだ、休み」

京香は清高の進学の一件から、自分の気持ちなるべく言葉に出すように心がけている。そうし始めてから、清高との距離も変わったように思える。相変わらず礼儀正しくはあるけれど、ときどき、彼は小姑のように小言を言うようになった。京香はそれが嬉しかった。

「ほら、これを食べちゃんと薬を飲め。そのあと寝る。ひたすら寝る。そしたら目が覚めるたびに体が楽になっていくから」

京香はトレイに乗せたスープをベッドに座っている清高に持たせた。

「……熱のあるときはお粥じゃないんですか、普通」

清高はマスクをずらして口元を開け、スープをスプーン

まだ誰かに守られてよかったとした不平やわがままを言い、毎日を楽しむだけの年齢なのだ。

「清高の保護者は私です。これ以上の話は私が聞きましよう」

京香は清高の腕を持ち立ち上がらせた。そのままリビングから追い出すように背中を押す。清高はこの家に来てから初めて感情を抑え込むことを忘れたような目をしていった。

「京香さん、僕なら大丈夫です」

清高は京香の目を見てそう言う、はつきりと頷いた。

「おじいさん、来てくださってありがとうございます。僕の存在があなたたちをどれほど傷つけてきたか理解しようとは思いません。だけど、あなたたちが僕を否定することをやめる必要もない。もう僕は否定されても大丈夫だから」

清高はそれだけ言うとりビングから出ていった。京香は彼が階段を昇る音を聞きながら、叔父を睨み続けた。叔父の顔からは表情が抜けたように、ほんやりと清高が出ていったドアを見つめていた。

清高と暮らしはじめて三年半が過ぎた。

彼はこの春、無事に高校二年生に進級する。

「かわいそうに、熱がなかなか下がらないな」

清高から体温計を受け取り、三十八度の文字を確認した

で一口運んでからそう言った。

「あのな、炭水化物っていうのは消化が遅いんだ。食物繊維と糖質しかないし、体が必要とするアミノ酸が足りない。その点、このスープはアミノ酸がたっぷりだぞ。カツオとイリコと昆布で出汁を取って卵をふわふわにして溶かしているからな。消化が良くグルタミンが豊富だ。おまけに岩塩を使っているからミネラルの補給も完璧だ。弱った細胞にはごちそうなんだよ」

京香の説明を聞きながら仕方なくといった感じで口に運んでいる清高は、それでもすべてきれいに食べきった。

「……京香さんってかなりの地雷物件ですよ」

薬を飲んでカーデイガンを脱いだ清高は、もそもそと布団へ潜り込む。

「三十半ばにして料理はできないし掃除だってできない。興味のあるのは薬剤の効能と副作用だけ。そこそこ美人に生まれているのに、悲しいくらい自分の身なりに気を使わないし、おまけに高校生の養いっ子がいて……」

そこまで言って、清高は頭まですっぽり布団に潜り込んで。

「京香さんが結婚できなかったのが僕のせいだったらごめんなさい。僕を引き取ったから……」

布団をかぶったまま清高が出す声はくぐもっていて、風邪のせいかわからないのかかわからないけれど、少し震えて

いるように聞こえた。

清高から出てきた『結婚』という言葉には聞き覚えがあった。

大方、どこかのお節介がしゃしゃり出てきて余計なことを聞かせたのだろう。

京香にとっては取るに足らないことだとしても、清高が聞けばそうでないことだつてある。この世で一番厄介なのが、正義感から内情も分らないくせにしゃしゃり出てくるお節介だ。自分が正しいと思ひ込んでるだけにタチが悪い。

「何を聞いたか知らないけど、私の結婚が破談になったのは両親が死んだからだよ。お前が来る何年も前の話だ。付き合っていた相手の両親が親のいない娘なんて嫁にもらえないって断つてきたのさ」

大学時代から付き合っていた開業医の息子との結婚が決まった矢先、両親が事故死した。そのことが彼の両親にとってネックになったらしい。『普通の家庭の娘さんを嫁に迎えたいから』と言われたときの気持ち、今でもどう表現していいのかわからない。少し前まで京香を自分の娘のようにかわいがってくれていた人たちが、急に他人になつてしまったのだ。付き合っていた相手は両親の言いなりだった。京香はどうしていいかわからなくなつていた。その後すぐに両親がいなくなった調剤薬局の薬剤師が数人辞め

ていき、残つてくれた薬剤師たちから京香が必要だと、呼び戻された。毎日、目の前の仕事をこなすことに精一杯だった。薬局を潰さず、残つてくれた人たちに給料を払う。慣れない事務仕事と破談になった結婚からの人間不信もあつた。

自分でもよく壊れずに今日を迎えることができたと思う。あの時は両親とともに薬局で働いていた香奈江を始め、両親を慕つて残つてくれた数人の薬剤師が世間知らずの京香を教え導き守ってくれた。

あの頃の京香はどしゃぶりの雨のなかで歩き続けているようなものだった。歩き続けるなかで、調剤薬局と薬剤師の彼らの存在は、空に向かつて枝を伸ばし葉を茂らせた木のように雨をしのいで少しだけ立ち止まり休める場所だった。独りでは歩けなかった。京香が壊れることなく、ここにいることができるのは、彼らがいってくれたからだ。

両親がいらない、完璧な家庭ではないということが社会からどんなふうに見られるかということを京香は身をもって知つていた。京香自身が何も変わっていないのに、両親がいなくなった瞬間、異物となつてしまった。そういう自分の立場が、あのときやつとわかつた。自分ではどうしようもできない環境を持つ意味を知つた。

入院中の祖母に呼び出され清高を託されたときに思つたことは、調剤薬局と薬剤師たちのことだった。両親を失つ

たときの自分がそうであつたように、十三歳の彼が世間からの雨を避ける場所が必要だと思つたのだ。

ミノムシのように布団が膨らんでいる頭の方を軽く叩いて、部屋を出ようと食器を持つた。

「しばらく家事ができないですけど、ちゃんと食事をしてくださいね。プロテインを溶かして飲むだけとかダメですよ」

京香は振り返らずに、わかつた、と返事をした。

清高と過ごすようになって四年半が過ぎた。

高校三年生に進級する春休み、彼は毎日予備校の春期講習に通つていた。理系を選択した理由を尋ねると、「京香さんを手伝えるように」と言つたから、「そんな理由で進路を決めるな」と言つておいた。彼の人生の選択に自分が入っていることが少し重く、そして、くすぐつたいような気分になつた。

家から離れた大学へ進学するなら仕送りだつてするつもりだし、学費の心配もしなくていい。そう伝えただけれど、あの子のことだから悩んでいるのだろう。

もしかしたら、あと一年で清高がこの家からいなくなるのかもしれない。そう思うと、どこか落ち着かなくなる。それを彼に覺られないように、平然と振る舞うことが上手く出来ているだろうか。

「僕の父親ってどんな人でしたか」

春休みも終わりに近づいたある日、清高は食後のお茶を煎れながら、視線を合わせることなく唐突に尋ねた。

まるで天気の話をするみたいに自然に振舞おうとする清高が不自然で、京香は心のなかだけで小さくため息をついた。きつと、ずっと聞きたかつたのだろう。この子はこの質問を何度自分のなかで抑え込んできたのだろうか。

「……どんな人だつたと説明できるほど近い関係ではなかつたよ」

京香は清高が目の前に置いた緑茶を手に取り、一口、口に含んだ。

すつきりとした香りが鼻先をくすぐる。いつのころからか、清高が煎れるお茶が京香にとってなくてはならないものになつていた。

京香は清高に座るように促した。

「お前がいっしょに暮らしていたばあちゃんうちの両親の結婚に反対でね。二人は駆け落ち同然に一緒になつたそう。結局はばあちゃんが折れたのだけれど、うちの母親とはずっと上手くいかないままだつた」

母は小さいころに両親と死別し、親戚の家で大きくなつた。奨学金制度を獲得し、薬学部に進学して父と知り合つた。

「だから、父が実家に呼ばれたときに私だけを連れて行つ

「なんだ。法事とかそういう行事ごとだったと思う。そのときにお前の父親の翔馬と一緒に過ごしたよ。といっても、小学生の頃までぐらいで、中学生になったときには父だけが帰っていたからね。自然と翔馬とも会わなくなった」

あとは母が病気で入院していたときに、世話をしに祖母がこちらへ来てくれた数日間だけが、京香にとっての祖母との思い出になった。まだ京香は小さかったし、父は忙しく入院中の母と子どもの両方を見る余裕はなかったのだらう。それと、それをきっかけに嫁姑の仲が近くなることを願ったのかもしれない。そうはならなかったけれど。

「大人しくて目が大きくて、優しい子だった。お前が初めてこの家に来たとき、あのときの翔馬が目の前に現れたのかと思ったぐらいよく似ていたよ」

目を閉じると、子どもの頃に遊んでいた翔馬の姿が浮かぶ。真つ黒な少し癖のある髪と、大きな目で立っていた。遠くから来た京香のために、迷子にならないように必ず横を歩いてくれた。あまりしゃべる子ではなかったけれど、

京香が訊★いた虫の名前や木の名前はぜんぶ教えてくれた。一歳年下の従弟は、京香よりいろんなことを知っていた。「小さいときに一度だけ父親のことをおばあちゃんに聞いたんです。そしたら、怒ったような泣きだしそうな、見たことのない変な顔をして黙ってしまっただけ。これは聞いてはいけないことなんだって思って、結局最後まで聞けません」

迎えてやる。その嫁に捨てられることがあっても、またうちで一緒に暮らせばいい。もし子どもがいたらその子もうちで見ればいいさ。そうすればきつと、すべて良い方向に進むようになる」

京香が笑うと、清高もホツとしたように体の力を抜いた。清高が家に来て五年半が過ぎた。「なんだこれは」

玄関の内側に貼り付けられたA4用紙を見て、京香は清高に呼びかけた。「出かける前にもう一度確認してください。」

- ①ガスは消しましたか？
- ②電気は消しましたか？
- ③床暖房のスイッチ、エアコンは切りましたか？
- ④スマホは持ちましたか？ 充電はしていますか？
- ⑤財布は持ちましたか？
- ⑥朝ご飯を食べないなら通勤途中にコンビニでおにぎりを買うこと」

京香は一つ一つ、指先で文字をなぞりながら声に出す。字は清高のものだった。

「忘れ物チェックリストですよ。京香さんが忘れそうなものを書き出していますから、絶対に剥がさずに毎日確認を怠らないようにしてくださいね」

でした」

「そう言う清高も、笑いたいような泣きたいような変な顔をしていた。」

「ばあちゃんにもいろいろ思うところがあったんだらうよ。自分だって息子の結婚を反対して、娘である美代子叔母さんも息子の結婚に反対して、挙句の果てにかわいがっていた孫の翔馬を失うことになったんだからな。うちの親にしてもそうだ。反対された結婚をして、あっけなく事故死して、その娘の私は親がいなかったらって相手の両親に結婚を反対されて。こういうの、何ていうんだらうな」

この一族をめぐる負の連鎖のような因縁めいたものは、どこからどこへ繋がっているのだらう。

「僕も……僕たちもそんなふうになるんでしょか。いつか京香さんも僕も憎み合うようになるんでしょか」

清高の眼は怯えていた。大きな黒目が小刻みに揺れていて不安な表情を隠すこともしていなかった。

「なるわけないだろう。そんな負の連鎖は私で最後だ。きつちり断ち切ってやる」

京香は清高を不安にさせたくなくて言っただけだった。けれど口に出した途端、それが正しいことのように思えた。どこかで断ち切るなら自分で最後にすればいい。こんなものは清高に引き継ぐべきことじゃない。

「心配するな。お前がどんな嫁を連れてきても大喜びして

自分の部屋から運んできた引越用の段ボールを足元に置きながら、清高はにっこりと笑う。

清高がこの家を出るまであと三日になった。

彼は希望していた防衛医科大学に合格した。全寮制、学費無料、月々十一万円の手当まで支給される。それだけに規律も厳しい。卒業後は九年間、自衛隊で勤務する義務もある。彼がそれをやつのけることが出来るのか、その心配はまったくしていない。

清高は最後までちゃんとやり遂げるだろう。それは希望ではなく確信だった。ここで五年半を一緒に暮らした。清高は大丈夫だ。

京香は他府県でもいいから国立大学の医学部を選んで欲しいと、心のなかでは思っていた。けれど、口には絶対出さなかった。清高の人生の選択の相談には乗っても、決めるのは彼自身であって欲しかったのだ。

「まったくいつの間にかわいい息子が小姑になったんだ？」

京香が玄関ドアの内側に貼られている紙を手で叩くと、清高は肩をすくめた。

「一人ぐらいい口のうるさい息子がいてもいいでしょう？」

心細い表情を隠すことにさえ失敗していた小さな少年は、京香が見上げないといけないうるさい息子が大きくなった。

「二人もいたら災難だ」

京香の憎まれ口にも動じなくなつた少年は、「剥がしてもまた貼りますからね」と憎まれ口を返すまでになつた。その成長が京香のなかに味わたつたことのない充実感を実らせていた。

清高が明日、この家を出ていく。

いつも通りに過ごそうと思つていても、なかなかうまくいかない。

清高に何度も明日の電車の時間を聞いたり、清高は清高で一日かけてたくさん料理を作つて冷凍庫をいっぱいにしていった。そういつたちよつとした非日常が、二人の生活の残り時間を知らせているようで神経が高ぶつてしまつたのか、その日の晩、なかなか寝付けなかつた。

そつと足音を忍ばせてキッチンへ向かう。食器乾燥機からまだ熱の取れていないグラスを取り出して浄水器から水を注ぎ、リビングへ移動してソファに座つた。

「京香さん、まだ起きてたんですか？」

声が出た方を見ると、リビングのドアから白いパーカーを着たまゝの清高が顔を出す。

「お前こそなにをしているんだ。もう二時回つてるぞ」

清高はリビングを横切つてキッチンへ行く。カウンターから見える姿を目で追うと、冷蔵庫を開けて牛乳を取り出した。カチャカチャと音をさせて、しばらくするとレンジ

の電子音が聴こえた。

「いろいろ部屋を整理していたら眠れなくなつてしまつて。良かったら一緒に飲みませんか？」

やわらかな湯気がのぼっているマグカップを二つ手に持ち、清高はソファの前のラグの上に胡坐をかいて座つた。

京香はマグカップを一つ受け取ると、両手でその温かさを包んだ。

「ここへ来て間もないころ、よく京香さんが寝る前にホットミルクを作つてくれましたよね」

清高はそのときのことを思い出しているのか、おかしうに笑つた。

「眠れない夜は牛乳に含まれているメラトニンに睡眠ホルモンの手助けをもらうといひつて京香さんが教えてくれました」

そう言いながらも、清高はマグカップを持つたまま笑い続けるのをやめない。

「おかしなことなんて言つてないだろう？」

「いえ、あの子の京香さんの説明が面白くて。なんて言つたか覚えてますか？」

座つたまま見上げる清高に、京香は首を振つた。

「メラトニンは脈拍、体温、血圧を低下させるから入眠しやすくなるんだ、だから、これを飲んだら絶対に寝られるから飲め。つて言つたんです。僕は子どもながらに、なん

えるのではなく、送りだす側になる。

ドアを開け放ちスーツケースを横に置いた彼は玄関の外に立ち、内側にいる京香に背筋を伸ばして頭を真っ直ぐに下げた。

それは彼が初めてこの家に来たときと同じ礼だつた。

あの子の小さな少年はどこにもいない。子どもに似つかわしくないきれいなお辞儀をする子だと思つた。それが痛々しくもあり、何とも言えない気持ちになつた。

けれど、今はそのきれいな礼に似合う男に成長している清高を誇らしくさえ感じる。

「ずっと、送りだすときの言葉を覚えていたんだ。だけど、いい言葉が見つからなくてね」

京香は頭を下げたままの清高の後頭部をゴシゴシと撫でた。

ここはお前の家なんだからいつでも帰つてきなさい。そんな安直な恩の押し売りみたいなセリフは吐きたくなかつた。

「これを持っていきなさい」

京香は清高名義の通帳と印鑑を、頭を下げたままの彼の手に握らせた。

通帳の中には祖母の家を売ったときに手に入れた金額に、国立大学の医学部に通わせるために準備していた四百万を足して入れておいた。お金はどれだけあつても困ること

て説明の下手な人なんだろうと思ひました」

清高はよほど面白かつたのか、目尻に溜まつた涙を指で拭つていた。

「そうか。その説明は我ながらひどいな。今ならもうちよつと上手く言えそうなんだけどな」

京香もミルクを一口飲んだ。甘くて切ない味がする。ホットミルクを飲むと、どうしても所在なく不安そうに立ちすくんでいた清高を思い出すのだ。

「だけど、感謝しています。僕のことを心配して気にかけてくれる存在がいることがこんなにも心強いものだ、それまで僕は知らなかつたから」

清高はそう言つたまま俯いて、ちびちびとミルクを飲み続けていた。

京香も黙つたままホットミルクを飲んだ。真夜中の静寂とミルクを嚥下する喉の動きだけが空気を支配していた。それはとても幸せな時間だつた。

清高が今日、この家を出ていく。

春先の冬の終わりを告げるような、やわらかい冷たさが残る朝だつた。

京香は清高を駅まで送ろうかとか、いろいろ悩んだ結果、この玄関で送り出すことに決めた。始まりもこの玄関のドアだつた。次の彼の旅もここから始めればよい。今度は迎

はない。清高のことだから無駄遣いはしないだろうし、必要なものがあればそこから使えるようにしてやりたかった。京香が出来る保護者としての最後の仕事だ。

ここはまた歩き出すために少しのあいだ立ち止まるための場所だ。

清高も今日、新しい旅にでる。歩き続けることが困難になる日が来るかもしれない。それでも、彼は自分の人生を歩き続けなくてはならない。だから、立ち止まるための場所になることが家族としての京香の役割でありたいと思っただの。

「泣くな、バカ」

顔を上げた清高の、手を伸ばさないと届かない頭を最後にくしゃっと撫でた。少し癖のある真っ黒な髪が風に揺れる。

「いってきます」

清高が初めてここへ来た日、細い針のような秋雨が彼に突き刺さるように降っていた。だけど、今日は水色の空が彼を見送っている。清高の大きくなった背中を眺めながら、京香は春を迎えた新しい空気を吸い込んだ。

（「八月の群れ」69号より転載）



葉山ほずみ

はやま ほずみ

1974 兵庫県生まれ

仕事で正しい文章を書く必要があったので文章教室を探し、2007年から4年半、NHK文化センター神戸教室「小説を書こう」に在籍。小説創作の面白さにどっぷりはまり、2012年から「八月の群れ」に所属。

第8回神戸エルマール文学賞佳作賞受賞
神戸市在住

八月の群れ

■野元 正 / 大森 康宏 / 葉山 ほずみ / 山咲 真季 / 西りん / 小柳 きしえ / 伊東 貴之

Vol.69

2019-11

八月の群れ

兵庫県

伸びやかな合議制と安い掲載料

文芸同人誌「八月の群れ」が発足したのは、一九八一年八月のことでした。今年で三十九年目、発行号数七〇号、人で言うならば、古希を迎えます。

大阪堂島の朝日カルチャーセンターの講座・芥川賞候補作家竹内和夫氏の「小説実習」の受講生の有志が集まって創刊した同人誌です。誌名は戦争の惨禍を忘れないため終戦の日八月一日を意識し、また大阪堂島で危なげな筏に乗り合わせた人の群れに由来します。

同人構成メンバーは最近では珍しいことですが、創刊当初から男性作家が多く、平均するとおおむね男女半々というところ。年齢構成は高齢化が進んでいますが、今回貴誌から「優秀賞」をいただいた葉山ほずみや「準優秀賞」の山咲真季など若手もあり、書き手の中核です。

当初は受講生だけで立ち上げたのですが、第二号から竹内和夫氏の指導を受けることになり、二〇一七年六月八日の「父の日」に逝去した氏が闘病生活に入る二〇一三年

六月まで長年、編集責任者として作品の事前審査、掲載順位の決定などを行い、「八月の群れ」にとって大きな存在でした。氏は同人誌と同人誌作家を支援する「神戸エルマール文学賞」、大阪文学学校のチューター、新聞社の同人誌評、新聞社の読者文芸の選者、小島輝正文学賞（4回）、神戸ナビール文学賞（13回）、神戸エルマール文学賞（11回）の選考委員、神戸市など地方自治体主催の文芸祭の審査委員などを歴任しました。その中で、同人誌や同人誌作家支援、発掘を「文学の地下水脈の発掘」と位置づけ、生涯、同人誌の仕掛け人と自称し、情熱を傾け、その功績は偉大でした。ですから、編集責任者の承認なしでは、「八月の群れ」の同人になることも作品を掲載することもむずかしかったのです。実質的編集事務はすべて同人代表がしていました。が、「編集後記」を書くこともできませんでした。もちろん事前合評会はなく、できあがった雑誌を合評する方式です。そうしたなか、一九八九年、突然『八月の群れ』発刊の経緯や掲載作品の可否、同人加入決定等に異議を唱えて一気に創刊同人、中核同人五人が、退会したのです。

その結果、「編集後記」は代表と編集同人の持ち回りとなり、竹内氏は作品を読み、掲載順位を決定することだけとなりました。その後、この体制は五六号まで続きます。彼が入退院を繰り返していた二〇一三年九月（五七号）



「八月の群れ」合評会後の懇親会風景

から「八月の群れ」の編集はすべて「編集委員会」の合議で行うことになりました。掲載を希望する同人は、五人の編集委員にメール（郵送は一人のみ）で作品を送り、各編集委員は読んでその批評を作者のみならず編集委員全員にメールで送る形式です。すなわち紙上合評会です。各編集委員はすべての批評を共有したのです。掲載順位も巻頭、巻末、第二番目と決定し、合意で行うとともに優れた作品優先、若手優先が編集委員会の総意でした。

同人全員での合評会は、過去の経緯から各号発行後にありますが、優しさのなかに厳しさが込められており、特に付度は一切ない重鎮の女性の批評は、一週間は立ち直れない優しい厳しさです。しかし、間違っていないため恨むことも出来ないのです。「八月の群れ」は一見優しい群れに見えますが、彼女が元気でいるかぎり怖い群れかもしれません。

しかし、合議制の編集委員会方式になってから、ある変化が同人の間起きたのです。各号ごとの応募作品数が多くなっていったのです。現在八人の同人ですが、常に六、七作品の掲載が続いているのです。これは今まで考えられないことでした。おそらく同人各位が自由に伸びやかに何のしがらみもなく作品を気楽に出せるようになった賜ではないか、と思います。

それと掲載料が安いことも原因かもしれません。各同人

の自己負担をできるだけ少なくするため、誌発行費も原稿料はもちろん出ませんが、年会費は月1000円、ページ当たり（二二〇〇字）掲載料は200円です。四〇〇字詰め原稿用紙一〇〇枚の作品で約6800円なのです。

どうしてそんなに安いのでしょうか。それは、校正は作者責任で行い、編集同人が版下まで作成して完全原稿で印刷所へ入稿するからです。

また「八月の群れ」に参加するのは人格優先ですが、簡単です。作品を提出していただき、二編集委員の承認があればいいのです。

今、「八月の群れ」は「代替わり」の刻を迎えています。そんなとき、わが若手の葉山ほずみが貴誌の「優秀賞」をいただけることは「八月の群れ」が新しい群れに羽化するきっかけになればと思っています。貴誌に心から感謝いたします。

（文責／野元正）

「八月の群れ」

〒673・0841 兵庫県明石市大寺玉町四・二

代表 野元正

TEL 078・912・8549



さあ、これから合評会

火鈴

木山葉子

冷たさが、落ち葉の舞い散る速度で天空から降ってくる。これまで流れ歩いたどの土地より日暮れが速いな、と沈んだ心持ちで考えごとをしつつ根元恭司は、店先の大瓶の花器を覗いた。

紅葉木の切り枝、菊など季節の花木はこのところ活けていない。時間の進み方が自棄に忙しくなくて、物狂わしい気分、花木一本投げ入れしてない大瓶の空洞もさることながら、妙に落ちつかないのは他にも理由があった。

店の赤暖簾を出し、ふと振り仰ぐと、右肩の二つ星山の杉の樹林が、整然と幹を立てていて、幹の部分は白いのに葉の部分はすでに黒く翳っており、日暮れが目に染みる時

「知人が経営している旅館で、折りよくそこに空きが出そうだからな」上田は、最近自分が働いている旅館にも近いと、季節の変わり目が恭司の流転の節目ともいうように、次に流れてゆく時期を告げて、先方が急いでいると、急ぎたてた。

ようやく慣れてきた頃になると次へ移る。いや、自分から気にくわれない職場は捨ててきた。この俺が、こんな所で？ と見下す職場も教あった。どうでもいいが、だが、内心落ちつかず、改めていつもやってくる焦れつたさと、それを楽しんでいようなふりに終始する。

一品料理「里村」。とうとうここまで堕ちたか、というほど小さな居酒屋である。

店の戸口に、「心をこめて準備中」のぶ厚い板看板を立てかける。それから彼は何を思ったか、つと川辺の方へと歩を運んだ。

隣接する本館の「大木旅館」の玄関先は賑やかで、地下につづく厨房裏口から、夕食を出し終えた若い女の子と男の子が、こちらの一品料理の居酒屋を手伝いに来るところだった。恭司の方は、先ほど本館の夕食の準備をあらかた済ませ、一足先に抜けてきて、この「大木旅館」が付け足しに新店している「里村」の夜の仕度に取りかかっていた。

「ごころうさん」手伝いの二人に声をかけて川橋の袂のあたりまで出て来ると、早くもボンボリが点る崖下の川辺に

刻だ。

山頂を這う雲の暗青色が、僅かな光を曳いているが、その光はすでに冬の色を帯びており、そろそろこの町を去る時が来たのだなと、恭司はその時期を察したのだった。このことはつい先日も考えた一件であり、恭司のこの心境と合致したかのように料理仲間の上田から、別の地への誘いがあったのである。

「えろう西の方だな……」気がすまない返事をした。

これまで何度か打診があった山陰の海沿いにある温泉場の辺りではなく、そこからかなり内陸部に入ったやはりそこも山間の温泉地だという。

は、スポーツの合宿に来ている生徒が大勢いた。水辺の砂の広場でパーベキューの後の余韻を楽しんで、右往左往し、彼等は水際に釣竿を立てかけたり、他はボールを蹴ったり戯れたりしている。

その様子を横目で見遣り、左右を確認し、恭司は走行車の頻繁な車道橋を横切り、すぐ脇に並立する幅狭い歩道橋に出て立った。

先ほど暖簾を出していた時、風鈴の音が聞えてきたのだ。それは唐突だった。秋というより冬に近い寒々しい季節の中で、日暮れに鳴る風鈴の音は異様だった。まるでその流れは、生き物が、頭を突き立てて身をくねらせ、一直線にこちらに向かって来るような。その勢いたるや凄じいもので、その物の形が、よくテレビなどで見るどこかの祭りの蛇踊りの、うねりのように、首を振り立て、暗黒の中を、そこだけは黒い縞になって向かってきたのである。恭司には、その物の影がはっきりと見えた。

風が激しく吹き抜ける路地を暴れ来る影は、龍の頭の動きを想わせ、黒い腹の太々しい身の熟しは、苦しむもののた打ちを、恭司にありありと見せつけた。風鈴の音が鳴り響き、避けようとしても避けられずに佇む恭司の足を、生き物の感触が素通りして行くのがわかった。

前方の川岸に建つ一かたまりの家並を見る。

街灯がすでに点る家並みの隙間から吹き流れてくる風鈴

の音が、徐々に形を崩してきて、ゆるい風が川沿いに吹き流れ、音がはたと止まった。彼はすぐさま風鈴の音の出どころを確かめるために、民家の一軒一軒を黙視した。見渡す家々は、川の岸に密集し、それぞれに「ごちゃごちゃと重なって向きを変え形を変え全体に平らにずつと向こうまで^{いらか}蕩の様を見せている。彼はその家々を熟々とみた。

晩秋から冬に向かう時季に、身の置きどころを捜す彼の現況は、自身を不安にさせているが、寒い風に吹き流れてくる風鈴の音は、実に異常で呆れるほど非常識で、それが意志をもつかのように、大きなうねりとなってこちらに向かつてきたのだ。刃物で胸の芯を突かれるような凄まじさに恭司は仰天した。「里村」の玄関に立つ自分を的にしたような、季節はずれという理不尽さもあって、いっそう凄みをもって感じられた。

これはいったい何なのだ！ どうしたというのだ！ この家並みの中のどれかの一軒が、日暮れの寒空に風鈴を鳴らしているのだ。それも激しく、故意に早鐘を打つようにいったいどう解釈したらいいのか。改めて見入る家の一軒一軒は、みなひっそりと窓を閉ざしている。

恭司は、それらの建物の中でもすぐ前の特に古びた土壁の家に目を止めた。ベランダに物を干しているのが見える。もちろん表側しかわからない。裏に窓があるのかどうか。ベランダというほどのシャレた物ではない。わずかに出張

った軒下のスペースの壁に沿って、古びた一本の竿を添わせ、そこに洗濯物をぶらさげているだけだ。

いまにも崩れてしまいそうな土壁の家だが、確かに誰か住んでいるのは間違いないのであり、いつ見ても洗濯物がぶらさがっていることから推察して、日が暮れても洗濯物をしまわないのはほとんど留守なのか。あれこれ想像を巡らし立っていると、又急に川風が吹きつけてきて風鈴がけたたましく鳴りだす。そのうねりが恭司をめぐって彼の無精髭の顔を打ちつける。

やがて何もかも漠然として、結局、恭司の前にそれらの風景は、意味もなく暗幕をおろした。

町並みが少しずつネオンを点し、物象のすべては闇に閉ざされる。この街も、また、ただの行きずりの風景になるのだな。全くこんなこと、何のかわりもない事じやないか！ 改めて見回して、縁のかけらもない土地での日々繰り返しては彼自身定着心もないのだった。

辺りの家々などの住人の、誰一人としてはつきり意識して見たこともない。店の前を行き来する人間もただ漠然と通り過ぎて行くだけである。こちらもいまだに肩で風を切つて世の中を見下げるふてぶてしさだけは消えずにいて、それでもまた一年が過ぎた。

赤提燈に灯を入れて、「感謝の心で商い中」の板看板を立て替える。店の中に、焼き物、煮魚の匂いが立ち込め、自然発生的に起こったもので、すべてがその一点に集約されてゆくように横領事件は起きたのである。

市で一番格式の高い「山上山荘」という旅館が、時間をかけて少しずつ崩れてゆく最後の爛熟期に恭司が料理長に抜擢され、係わった事件で、最初は、彼の幸運と仕事の勢いに拍車をかけて、何もかもが思い通りにいった。そして、しまいにすべてが弾けたのである。

人生は一瞬のうちに変転する。人間の悲哀が一夜にして、彼の肩にずしりと重しをおいた事件だった。

二つ星山の裾野を西へぐるりと回って、陸橋下のトンネルを抜ける、写真館の辺りからゴタゴタと並ぶ古い商店街の建物の様相は、歯が抜けたような廃墟の過疎の街並みである。過疎は田舎の村に限ったことではない。街場の中にも起こる。まばらな民家、商店の廃業の空家が甚だしく、その通りに建つ鉄骨造りの二階の一角が彼の郷である。下の階は、スナックバーと焼肉店だがどちらも流行っていない。彼は、ここで六年前に一緒に逃げた女と暮している。女と別れることもできず、ぐずぐずと日を送り、そのうち二人の間が荒んできて、このごろは喧嘩の絶え間がない。

錆びた裏階段を上がり一歩中に入ると、玄関に転がる女のサンダル、室内に散乱する女の衣類。もう別れているも同然の暮らしをしており、最近女には他に男がいるような気配が伺える。川下の温泉街で働いているのだが、女はと

隣の本館の泊り客や、夜な夜な決まって集まる近隣の四、五人のメンバーが、一人二人と来る。近場の常連客を相手に料理を出し酒を出す。最後の客を送り出し暖簾をしまい、手伝いの女の子と男の子を帰すと、黒前掛を外し、白衣から私服に着替えて店を出る。

右肩に峙つ、二つ星山の山容はすっかり闇に溶け込んでいる。すぐ前の独居老人が商う「うまたこ」のたこ焼屋も火を落とし静かだ。通りの四ツ辻を左に折れ、美容院、薬局、自転車屋と並ぶ、古い街の沈んだ暗がりを歩いて行く。けだるい歩行をくり返しているうちに山城下のもう一つの古い街に入る。

橙色の常夜灯の明りの下を伝い、人っ子一人いない中へ家に向かう。警察に追われるまでの犯罪者というわけではないが犯罪者にまちがいはない。なぜなら、隠れて世間を渡る羽目になったのだから。短期的に、三ヶ月、半年と場所を変えて渡り歩いてきたこの数年が、あやふやな時間となつて記憶の中で蠢く。

恭司は、六年前に起きた事件を何度も振り返る。故郷を追われた時の突然の身の変転、繰り返しの日の光景がフラッシュバックする。理由ははっきりしているのだ。自惚れ、自信過剰、油断、人生が絶好調で肩で風を切っていた若造が、易々と汚職事件に係わってしまったのだ。それは、

きにアパートに帰ってこないこともある。

六年前に故郷を追われ逃亡する際、新幹線のホームに立ち、これからの先行きを思索した。考えがまとまらず、右をとるか左をとるか迷った。恭司の頭の中で決断しかねたことは、妻のゆき子を捨てて、目の前の女、安田真美をとるという無茶苦茶な選択だった。それほど、女に対して恭司の気持ちは強かった。激しい恋情にとり憑かれていた。唯々彼の脳裏にあったのは、女へのどうにもならない情欲だった。

又、一方で恭司の胸を狭くよぎったのは、女との逃亡という形でのもう一つの逃避の選択だった。緊迫した状況下での、もう一つの無謀な行動思考が彼を左の方へと決断させたのである。妻のゆき子をとるのではなく、目の前にいる女をとることだった。女との同行は、すべての放棄という形で現状を打開できると。どれだけ籠をはずしてもまだ自分の向こうがあるように、事を延長する。女の顔や体や手足といった肉体的なりアルなものに迫られるその一点で他の諸々のこと、妻のゆき子の存在や人間性までかき消される。

あの日、彼の目にありありと見えたのは、女の口元に浮んでいた灰のような歪みだった。恭司は女の白々しい表情にこびりついている自分への情欲を見逃さなかった。淫欲

次から次へと破れ穴が増えるように、捨てた相手のことが分かってくるのも否だった。適当にやってくればいい。

捨てた者に用はない。捨てられた者にもこちらに用はないだろう。そういう思考で浅はかに、盲目に進んでゆかねば世間など渡つてはゆけない。それに、無謀もいところだ。駅のホームで、寒空に流れる暗雲を見ながら、自分の中から滲み出る感情に無防備に、右手で女の腕を掴み取ったのだから。そういう非道をやつてのけた男が、今さらあれこれ弁解する余地などないし、破れ目からどんな何かが広がってゆくのも見たくない。

恭司のそういう勝手気儘な性を上田は心得ていた。ただ、横目で見ながら、これまで六年間恭司の職のことも心配し、女のことも含めて遠隔的にすべてを見てきている。上田は始終恭司に連絡を取り、ゆき子の現況は口にしなかったが、言葉の端ばしに常に何かを暗示し、示唆していた。

もともと、上田とゆき子は、恭司を挟んで、よく気心をかよわせていた。恭司とよりも、上田の方がゆき子は意思疎通ができていて、そう思った。十一年前に、恭司がゆき子と結婚したときも上田は、親身に世話をやいてくれた。結婚式の仲人役に始まり、結婚後は恭司の家の内情に至っても、ゆき子の生活の側の詳細にまで気にかけていた。だからと言って、ゆき子に気があるわけではない。いわゆる

の歪みとでもいうのか。恭司を見る女の中に挑むような炎が燃えて、唆そとされている。言うならば女の方にも恭司と同じようにどうにもならぬ恋情があったということ。牡が雌を恋う、そのものの顔の歪み、いわゆる激しい欲情が狂わしいほどお互いにあったのである。妻のゆき子にはなかった激しいものが、真美という女の口元に灰のような歪みを見せて、その歪みがそのまま消えず、逃亡の間張りついていたのだが、このごろそれがふっと消えのつべりとした顔になり、かわりに恭司に対して蔑みの色が出てきた。そうなる、恭司の方も同じく興味が失せたのである。

「嗚呼、もう飽きたわ！」女は、吐き捨てるように言った。男と女の結びつきなど埒ちもないものだ。

考えてみれば、始めからばかばかしいことの連続だった。それでもそれは現実であり、逃亡の日々に細かな線描をありありと描いている。

職場が変わるとき、上田との連絡に際して、恭司は妻のゆき子のことを口にはしなかった。だが、だいたい察していた。上田は、はっきり事の次第を話さないタイプの男で、すべてを呑み込んでいるような鷹揚な面がある。彼が、何かとゆき子の相談に乗っているのはわかっていた。それは、結婚後の有り様から思うことだが、彼が今も変わらず相談相手になっていることは明らかで、だから、恭司の方も妻の現状を聞くのを避けてきた。一つを聞くと、二つ三つと

恭司もゆき子も、上田にとっては親しい友であり、長いつき合いは変わらず続いているのだ。

妻のゆき子は、四国の香川県の出身で、恭司の家とは遠縁にあたるころの、いわゆる親戚関係の者だった。彼女との結婚は、親戚同士のやりとりで決まったことで、何の期待もなくはじまったのだが、一緒になってみると意外と夫婦仲は順調だった。温和しい性格で、今思うと容貌は世間並み、いやそれ以上である。よくよく思えば真美よりもずっときれいだ。何よりも堅実に諸事をこなす。化粧品の中で働いていたというが、思いがけなかったことは、何の期待もなく始まったその結婚が、思わぬ方向に恭司の運命を好転させたことである。

恭司の勝手気儘な性格を、泡のように吸いとる。物怖じもなく一見平凡な感じを人に与えるが、それだけにすぐに田舎の村に抵抗なく溶け込んでいったのだった。昔のやり方で一風変わった生活を押し通す恭司の父親にはもちろん、その頃すでに癌の末期だった恭司の母親に対しても、彼女はよく仕え、辺鄙な山奥の村の、口やかましい人間たちとの交流でも、その素直さをかわれ、評判のいい嫁として申し分なく自分の立ち位置を固めていった。それなのに、逃亡の際に恭司は、妻に一言の連絡もせず駅のホームで、傍らに並んで立つ同じ職場の安田真美の腕を掴み、すべり込

んできた電車に飛び乗ったのである。生きる場所を替える男には共に行く女が要る。それには拠所ない事情がある。それで充分だった。

広島県の北西部に位置する市街地の小高い山の上に建つ老舗旅館「山上山荘」の汚職事件は、連日のようにテレビのニュースや新聞で取りあげられ、まもなく名高い老舗の料亭旅館「山上山荘」は倒産した。恭司が料理長に抜擢されて二年後に起こった事件である。当然料理長である恭司も事件に関わっていた。それまで少しづつ傾きかけていた山荘旅館の経営状態は、支配人の金の持ち逃げで致命的なものとなった。蓋を開ければ、従業員の大方がなんらかの形で汚職に関わっており、長い時間をかけて、じわじわと旅館は蝕まれていたのである。

一ヶ月ほど経って汚職の大元である支配人、副支配人の二人が草津温泉のあたりで捕まったというニュースがテレビで流れた。その後、恭司も世間から身をくらまして居所を点々と移し、逃げ隠れる身となったのだ。警察沙汰になり騒ぎが起きたときはすでに旅館は崩壊しており、旅館の倒産がすべてをチャラにして終わった。だから叩けば埃の出る身である。若い女と手を取り合って車窓に流れる風景を見ながら恭司の心は軽かった。女と共に逃げられる心頼りと、熱愛の最中にある男女の先行きに、逃亡を余儀

なくされたという世間的理由は、これ以後の自由で気儘な生活に、むしろある種の解放感すら与えられた。故郷不在の立派な理由を隠れ蓑にして恭司は、女を連れて転々とした。

最初は、奈良の方の旅館に流れた。次に、京都の三千院に移った。恭司には「山上山荘」の時代の以前からの料理仲間が大勢おり、その中でも上田は、「山上山荘」の前の職場である「城山ホテル」の時代からの知り会いで、先輩格で職歴も恭司よりずっと長い。逃亡後は、この男と常に連絡を取り合い行動してきた。

上田が、これまでの大勢の料理仲間との連絡網を持っていることは実に助かった。あちこちと散った仲間とのついで短期間を働いては居を移し、京都、奈良、大阪と転々とし、現在は、ここ兵庫県の北西部の旅館で働いている。その間六年が過ぎた。逃げてても逃げてても悪い噂は、どこからともなく洩れてきて、陰口をたたかれ、そのことに腹をたてて嫌気がさしそこを飛び出す。安田真美との関わりも大つづらには出来ない始末で、逃亡者の悲哀に、男女の仲などの面倒くささを抱え込み、とつくの昔に二人の仲は崩れている。何に対しても焦れつただけがつき纏うが、籬をはずしてもまだまだ自分の向こう側があるような底抜け感に、自堕落がエスカレートしてくる。

上田に急かされ一週間が経ち、再度上田が連絡してきて、例の、彼が一年ほど前から働いている同じ温泉街にあるらしい「高橋亭」という旅館の下見に行くことになった。

その日は、朝から豪雨だった。恭司は、乗り替えの電車のホームに降りてくると、中ほどにある売店でタバコを買い、吸いながら激しく降る雨を見て立った。背後から来た女が脇をすり抜けて行った。女の髪が、真っ黒いストレートの髪で、はらりと肩に垂れ、襟元の桃色のスクーフが淡くふわふわ巻きついている。

恭司の目に水しぶきと共にかすんで動く女の像から桃の花のような情感が甦るようにたちあふれ、何か掴み取れない、掴めない意識を湧かせた。

逃亡者となって、行く先々で、傍らに並んで立つ女と、彼の気持ちの中で流れ続けていた別の淡いものを、思い出さずとも、それがずっと呼んでいたような、なんとも言えない空しさに襲われた。風で干切れ飛び地を転げる落葉となったことを後悔するというより、熱情に溺れていた自分の心の端に常に流れていた別の感情が、ありありと雨の飛沫に透けて見え、妻のゆき子の存在が現実には浮きあがって、日頃から血の気の悪かったゆき子の顔が、彼の目のレンズの霞の奥をよぎるのだ。

妻に対して今更、ああだこうだと言いつつ諷することではな

いが、それでも優しい余情を引いていることは隠しようがない。恭司の胸の半分の得体の知れない狂った情は、真美のような野放図な女によってかきたてられる情であり、それと対立している、すべてがやさしく包み込まれる、幽かな情というものを恭司は雨の中で感じた。

男は狩りをする生きものだどつくづく思うのだが。獲物を見つけると即座にそちらに向かつてゆく。平凡な日常の些細なことには目を向けず、常識に従順に従わず適当に抜けてきたこと。その抜けは、彼の出世の要因でもあったのだ。世間を舐めてかかる男の向こう見ずは逆に自信となり、仕事の面で買われて、創作料理などという開拓を試みて、「山上山荘」の当時の料理長が、恭司の腕を見込んだ。その料理長が、「山上山荘」を退き、独立して料理屋を出店することになった時、料理長は恭司に言った。「この、山上山荘の料理長をやってみるか」「やってみます」。その一言で彼の人生は変わったのである。

安田真美との関係は、それに勢いをつけた。家に常時いて何やらコトコトと細かな諸事を丁寧になしているゆき子という妻の存在は、恭司には稀薄なものだった。そこいらにいて当たり前、彼女がものを言うときの、口の細やかな動きや、目の優しさや、淡々としたそれらの表情の有り様は、あまりにも控え目で、無関心な恭司にはなおさら彼女

横を素通りした女が、若々しい長い黒髪をゆるする仕草が向うに行くにつれ、雨に霞んでホームに桃の花のような淡いものが漂う。そこにゆき子を思い浮かべている。同時に彼女の口の動きを合わせて見ている。幽けきという言葉が彼女の口からぼんと飛び出し、これまで分からなかった、あの日、何か言いたげだった彼女の口元の動きを彼は、ありありと思いついたのである。かそか、かすか、かそけく、かそけき。彼女が口にしたそのどれかの言葉は、何を意味していたのか。その時の模様が蘇ってくる。かそか。かそけき。かそけきこと。かそけき音。

彼女が嫁入りしてきた当時の模様で、一つだけ印象に残っている光景がある。あれは、夕暮れだった。そつと立ち上がり、ゆき子が、部屋の窓のところに何か吊るしていた。その物が、ふと目に浮んだ。確か恭司はその時、

「何だそれ？」と聞いたような気がする。

「風鈴よ！」ゆき子は言った。

「風鈴？」

恭司が首を捻ると

「音がないう風鈴」と、彼女は言った。

「学生の頃、旅行で行ったとき買ってきたものなの」

ゆき子は、それを吊るしながら、学生のとくに、友人幾人かに行った旅の持ち出しで、幸せな旅だったと言った。ほんとうに楽しかったと。なんの屈託もなく言った。

新婚旅行もせず、日常生活が始まって彼女のどんな事にも興味を寄せずにいた。

「ふうん……」

恭司は、なんの共感もなく言った。

「ほら、かわいいでしょう！」

ゆき子は、網糸で傘を編んだような、風変わりな天蓋の下にぶら下がる貝がらの幾連かを、指先で揺らした。新婚だと言うのに、妻の顔の表情を気にかけて見ることもしなかった。いろいろとあったこともこの頃分かってきたが、まだ漠然としている。

「これ、風鈴には見えないわよね」

恭司が、興味なげなのに、

「これ、貝殻よ。その旅行に行ったときの、自分へのみやげ」

「自分へのみやげ？」

「与論島の貝よ。風鈴だと知らなかったわ。売店の軒先に垂れていたの。潮風に吹かれて。白く晒されて。何の音もしないし不思議に思って、これなんですかって店主に聞いた。それがとてもよくてね。私がずっと捜していた物に出会ったみたいで。鳴らない風鈴っていいでしょう」

ゆき子は、故意に貝殻を手で揺らした。かすかに擦れ合う音がした。

「風鈴というにあまりにかそけくて」歌うように言い、ゆき子はつづけて何か言った。歌の歌詞なんかで自分の意図することをカバーして言ったような気がする。

「でも、揺らせば触れ合って鳴るでしょ。こんな風にふれ合わない」と鳴らない。一つ一つの貝が擦れ合って鳴るのよ。擦れ合って傷がついて、しまいに原形がなくなる。それまで何十年かかるかしらね」あれは夫婦のことを言ったのか。

恭司の田舎の家に、上田は泊りがけでよく遊びに来た。彼は恭司の家の生活形態がすこぶる気に入っていた。恭司の日頃の、華やかな、旅館の料理長という立場と彼の実生活のギャップを面白がった。なんとも時代にそぐわない。それがおもしろい。風変わりな家だ、と。この山奥でなんとまあ、のんびりできることかと。

風呂は薪を燃やして沸かす。水は、山から引いてきているんな所で使っている。周囲は山ばかりで、恭司の父親の幼少期から、そのまま生活の変わらぬ形態を持続し、守りつづける。その敷地の中にある裏山の木を父親は伐採して、小屋に積み上げ、薪は一年中あり、それでカマドでメシを炊き風呂を焚く。

上田は、その家で家事をするゆき子の間違った生活にも呆れていた。寝たきりの姑の物を時にゆき子は籠に背負って山川に降りて行って洗っていた。

恭司に女がいることをゆき子は気づいていた。子供はまだいらないうの。僅かしか金を家に入れないのよ。ゆき子の言う事にあきれて、それはいかん一番肝心な事じゃないかと上田が警告したが、それでも恭司と別れる気はないとゆき子は言った。

ゆき子は、恭司の不在に、舅と二人になった生活をどのようにしていたのか。その部分だけは不可解で、一度は聞いてみたが、彼女は笑っていた。上田はその種のことは、以後何も聞かなかった。また恭司も言うことはなかった。上田もその後、故郷の山陰に帰り、周辺地で旅館の仕事のみつけて、彼自身も転々としていた。

汚職は恭司の色々な側面からの結果だとしても、そこにはどうしようもない人間の資質が作用しているのだと上田は時に穿った事を言い、恭司を戒めた。汚職事件前に母親が死に、恭司は逃走し、舅と二人きりになった家でゆき子は相変わらず暮らしていたのだが、その後は香川に帰っているはずだったし、上田も、その後のことは何も言わないし聞くこともなかった。

雨の中を断層をなして流れる風は冷たく、車が山中の狭隘な道に入るとつれて、その風の冷たい髪の中に押し込められてゆくようで、恭司は一瞬のうちに自分の巡りが味けなく変わるのが分かった。

考えることは全く空疎なことであり、時々車窓を横切る鳥はそういう時も緩慢な影の流れだった。

雨はますます激しくなり、洪水がおこる心配があるほどの降り、無言で運転する上田も何か別のことを思っているのか、互いに世界を別々にしている。その中で、霧が立ち込め黒い陰影を見せ、山並みの一つ一つの山肌にも薄い霧の水蒸気が、雲のように這っている。市街から全く逸れて山を越え、いくつもの村落を越えると、山容は鏡のように透きとおってくる。黒髪をなびかせたような峰が一つ傾きながら目前に現れると、無気味な気配を立てて霧が流れた。「あれは、なんと山なんだろう？ 異様な雰囲気を持つてるな」恭司が聞くと、

「黒姫山よ。女が髪をなびかせているように見えるだろ、いろいろな伝説がある山でな。確か、何かの時に、誰かが逢いに寄ってくるんだって、そういう話も聞いたなあ」

上田は、話の中味を飛ばして妙なことを言った。そんな会話をしながら、また少し走り、街の繁華街に入った。都心とは違って、山場の街は、実に和んだかんじでゆったりとした空気を囲っている。

「板倉別荘」という大きなホテルを上田が指さし、最近俺が働いている所だと言った。そのホテルから四、五分ほど車を走らせ、途中街なかで、すれ違った老人を呼びとめ、上田はこれから向かう「高橋亭」の場所をたずねている。

の広い窓の向こうに、桜の並木が見えた。その手前に小さな橋がかかっている。橋の下を晩秋の澄んだ水が流れている。細い流れの小川だった。小川は、左から右方に向かって流れていて、光を弾じり水を弾かせつつ波紋を織りながらところどころ瀬音を立てて勢いよく流れている。

左側の窓ガラスからも川が見えた。川面から視点を前方に移してゆくと、街を背にする小高い山、例の黒姫山がこもりとした形を盛っていた。再び眼下の川岸を覗くと、浅い水底に朽ちた木の葉が一面に沈んで水は冷たく光っている。

「ここにも川があるのか」

恭司は頷き言って、すぐ目の下の岸辺りに、なんの花か白く一かたまりになって咲いている、その絶妙な配置と、温泉の匂いに包まれる雰囲気緩慢さに惚れ込んだ。

宿の主人が、つと部屋に入ってきて仲居がお茶を運んできた。さっそく主人は、宿の内情を話し、人手不足で困っていると言いつつ、恭司に向かつて、なんとかお願いできないかと言った。上田は、ここの主人の兄の知人だと言うが、その若主人と他のことをひとしきり話し、恭司の料理の腕前は確かだからと、前の「山上山荘」での汚職事件には触れず、恭司の腕を話の合間を縫って強調して、広島の方の一流のホテルで料理長をしていた男で、事情があつて、この四、五年修行をかねて、京都、奈良の方の旅館で働いて

彼もまだ行ったことがないその旅館は奥まったところにあった。観光地からは少し外れたところにある温泉街だが、繁華街らしい通りを抜けて行くのに、街の賑わいはたいしたもののである。三差路の奥に現れた一軒の旅館が目についた。パタパタと暖簾が風にはためいている。その左側に大きなホテルが建っていた。こちらかなと思つたが、そうではなく、暖簾がはためいているこじんまりとした旅館の方が、「御宿高橋亭」だという。

上田の知人が経営するというその旅館の竹まいは、恭司の気持ちも落ちつかせた。こういうところでひっそりと隠れて働くのも悪くないと外見から思つた。玄関先に白いワゴン車が一台乗り入れてある。上田が暖簾をくぐって中で何やら話していた。彼が外に出てくると、宿の主人らしき男が続いて出てきて、上田に紹介され恭司に挨拶した。

男は、びっくりしたような、つぶらな目の若者でいつの間にか傍らに並んでいるほっそりした女性は、ここの若女将らしく、彼等は、上田とひとしきり話し、とりあえず、と言つて恭司と上田を中へ案内した。部屋に通され、上田は今日の昼食を予約していると言つて、久々にこれまでの憂さ晴らしをしようとと言つた。お互いにこの世界でせかしかと生きる男の、久々の憂さ晴らしである。

一階の一番見晴らしがいい部屋に通された。ガラス張り

いたと、そんな表面のことだけをざっくり話した。

いつの間にか外は雨が激しくなつていた。若主人から客室を案内された。どの部屋にも、内風呂があり、戸を開けると、一階の露天風呂が左方に見えた。

「『殿の湯』にどうぞ。『姫の湯』には、客がひとり入っているの、本当ならどちらに入ってもらってもいいのですが」と、若主人は言い、姫の湯の方がずっと広いのですよ、とも言つた。

恭司は、湯舟から下の雨の川を見ながら入った。湯船の縁は、すぐ川岸といった感じであり、湯はぬるぬるして気持ちがいい。あちこちの旅館を渡り歩いてきたが、こういう感触の湯は初めてである。恭司は、ゆつたりと痩せた体を湯に浸した。

「桜の咲く季節がいいですよ、花吹雪が湯に吹きつけてくるんですよ。生憎と今は、秋の終りで、でもあの並木の桜の葉っぱが赤く染まってましてね。それが風で吹雪のように湯に散ってくるんですよ」

宿の主人が言っていたとおり、橋の向こうの桜並木が紅葉しているが、紅葉といえどすっかり落ちて僅かに残っているのが、時々ちぎれて飛んでくる。花が咲くといひ眺めだろうな、と恭司は思つた。

さきほど上田の車で走ってきた時は、霧が立ち込め、黒

姫山は無気味なほどの黒い陰影を山肌に露骨に見せていたが、殿の湯から眺める街の背の「黒姫山」の全容には、薄い霧の水蒸気が立ちこめ相変わらず雲のように這っている。この街のシンボルであるらしい。「黒姫山」という山は時折、鏡のように透きとおるといふ。それは、雨の中で見る不思議な現象だとか。体を動かし湯船を波立たせると、その山の霧に波が連動して、無気味な気配が立ち、湯気が前方に流れる。

「この山は、何かの時に誰かが逢いよつてくるそうなの、そういうときは頂に黒姫様が立つとか」

上田が言った妙な言葉を呑み込むように、黒い霧がひとしきり流れた。

下の桜並木の通りを傘をさした女が通っている。女は、雨の中をゆっくり歩いて行く。その様子が、湯舟からずっと先まで見通せた。並木が途切れる端の赤信号のところまで行くと、女は少し待って、横断し、向うの曲りへ消えた。恭司は、女が霧にかき消えるまで目で追った。

湯船から出ると、入れ替わりに上田が入ってきた。これまで何をしてたのか、食事のあと、宿の主人に頼んでいたアパートに行こうという。どういう場所か、一応確認しておいた方がいいだろうからと。

湯から出た二人を、宿の仲居が部屋に案内して昼食を出した。

させ通りすがりの老婆にアパートの所在を聞いていた。さきほど、湯船から見えていた、傘の女が渡って行った信号機のある交差点を渡り、その向こうの道をし字に廻り、真つすぐ行ったところだと老婆が言った。そのとおりに行くと、アパートはすぐにわかった。「高橋亭」の従業員がたいてい借りるのだという。二階建てで、その周辺にも旅館らしきものが数軒建っていた。部屋は、二階の東の端の二〇五号室だった。鍵を開け中に入ると、部屋の中は明るく、きれいに掃除されていた。二間続きの外の、ベランダに出てみると、右方斜めの位置にアパートらしい建物が一軒接近して建っていて、「黒姫山」の山容が、ま正面の家並の間から透けて見えた。

しばらくして、「里村」を辞め、恭司は単身で、「黒姫山」の温泉地に移り、例のアパートに落ち着いた。「高橋亭」に通い、曖昧な関係の女を切ることもなく、落ち着いたアパートに、誰からも邪魔されず久々に一人過ごせることが、不思議なくらい平安なのだった。

ベランダに出て、タバコを吸いながら辺りの景観を眺める。一番近い距離のところを迫っている建物は、横長に窓を連ね、その横長の窓一面に白いカーテンが引かれていた。窓の全面を一日中カーテンで閉ざすその建物に、人が住んでいるのかどうか分からない。夜になっても灯りが点らな

「普段は、だいたいこういう料理を出しています」
いつの間にか若主人が入ってきて、てらてらした顔でいう。この顔のてりは、この湯の所為だとわかった。

「板前さんの一人が、故郷に帰ることにになりましたね。できれば、彼が居る間に引き継ぎなどもして欲しいので、早速来月からこちらに来ていただけませんか」

真ん丸い目をして言った。

食事は豪華だった。六千円の料理で、刺身(鯛)、天ぷら(エビ、なす、ししとう、かぼちゃ)、アワビの酢の物(アワビ、うど)、これは格別に味がいい。和物には、金粉がふりかけてあり、手まり模様の器に盛られてある。温泉豆腐に牛のしゃぶしゃぶ、塩辛(高級なもの)、茶そば、煮物(エビ、その他)、ご飯と吸物、漬物、果物のメロン、どの料理も品よく、器も上品で日本的なもの。気がついたのだが、その部屋は、「藤つぼ」、隣室は「花散る里」、と皆源氏物語から取っている。

恭司は、この程度の料理ならお手のものだと思った。

「山上山荘」に居たところと似たりよったりで、負けはしないと自信を持った。京都、奈良あたりの旅館も、似たような料理を出していた。それにしても、なんとも壺にはまったような心地で、ずい分と落ちつける。

上田は、食事が終わると早速恭司がこれから住む予定のアパートに彼を連れて行くという。上田は、途中車を徐行

いからだ。気がついたのは、恭司の部屋と、その建物はかなり接近していることだ。左手に迫る山は垂直に近い斜面を荒涼しい常緑樹で埋めていた。山裾の竹藪の葉が鳴る音が、サラサラと響いてきて感じがよかった。だが、その竹の葉ずれの音に混じり、風鈴が鳴る。またか！どこに行っても風鈴に追いかけられる。

雨風の日、南の奥の「黒姫山」の方から、強い風が吹いてくるといつもより鮮明に、チリンチリンと風鈴が鳴った。それが連鎖し、飛火してきた例の風鈴のような感じがして、恭司が嫌な顔を見ると、遊びに来ていた上田が、笑って恭司の顔を覗き込んだ。

「寒い時季の風鈴は、いだけない」

「苦虫をかみつぶしたように恭司が言った。」

「風鈴？ そんなものがどこに？」

「いま鳴っただろう！」

「何も聞えなかったよ！」

「そんなはずないよ。ほらあそこ、白いカーテンを全面に見せているあの辺り」

「そんなはずないだろう。窓が皆閉まっているよ」

「どこかでそれが鳴っているんだ。誰かが鳴らしてるんだ。全くどこに行っても風鈴が鳴る」

上田がケラケラ笑った。

恭司は、音が聞えてくる方向を指差して言いつのる。そ

のうち上田が首をかしげ、

「あれは、風鈴ではないよ。ほら、よく聞いてみるよ。あれは、何かがかすれ合う音だよ」

よく見ると、白いカーテンのひとつところが、少し開いていて、なにかを吊るしたような物が確かに見えるのだった。その時、恭司の記憶に蘇ったことがあった。三連ほど数珠つなぎになった貝がらが、三角錐の形をとって、風が吹くと三方に広がったり、閉じたりして、貝がらどおし触れ合っている、チリチリと、かすれ音を放っていた光景だ。

「与論島の貝！」

恭司の口から発せられた言葉は、恭司自身も気づかなかった、どこかで聞いた言葉であった。

「与論島の貝？」

上田が、いぶかって聞いた。

「ああ、与論島の貝だ！」

恭司は、まとはずれのことを躍起になって言った。

「与論島の貝か、それがどうした」

上田が、また笑って聞いた。

「いつだったか見たことがある」

恭司は、そう言いながら、その貝の風鈴を見た時の記憶を辿った。夢か何かの記憶のように、その音がかすかな響きをたてている。そして、ゆき子がその向こうで笑っている。新婚旅行も行かなかったはずなのに、与論島の風景を

思い描いていた。

「貝がらと言うにあまりにかそけて……」。ゆき子の口から出てきた歌うようなあの台詞は何だったのか。恭司の記憶の中に、ぼんやりとこびりついている、かそけてということば。その時の彼女の顔は、妙に嬉し気だったのを憶えている。何が嬉しかったのか……。彼女が、次に言った言葉はなんだったか……。触れ合って鳴る和論島の貝……

その和論島の貝のような響きを夫婦に求めたのか。

強い風に晒されて今、どこかの隙間から鳴ってくる風鈴は激しく、「黒姫山」から吹く風に混じって恭司の胸を刺し通してくる。貝の風鈴ではない別の風鈴が鳴っているのだ。

ゆき子の言う鳴らない風鈴はそれだけに、恭司の知らない娘時代のゆき子の青春を匂いたたせてきて、そして、和論島の貝の話が多くのことを思わせた。ゆき子は、誰と旅行したのか。いつまでも彼女が大切に持っていた貝の風鈴だ。「和論島に行ったのか？ 誰と？」あの時は、何も問わなかった。ただ、彼女の笑った口元の歪みが目に残っている。恭司と会う前に過ぎた彼女の青春時代が思われた。

上田と酒を飲み、職場の話をし、まだ切れていない安田真美とのことを話した。又、雨風が吹きはじめ、「黒姫山」

が真っ黒い姿に変わり、雨が窓をたたいた。前方の家の北窓はまだカーテンで閉ざされ、「黒姫山」の風の音と、恭司めがけて鳴ってくる風鈴とが一つになり、荒れに荒れる。「二つ星山」の下の一品料理「里村」で聞いた風鈴の音は鉄製の重い響きで早鐘を打ち叩くように鳴っていた。

「高橋亭」に移り、一ヶ月ほど落ち着くと、安田真美が乱れた様子でやってきて、相変わらずの自堕落な生活が始まった。真美は、アパートにそのまま居すわり、恭司とは別の旅館で仲居のような仕事を始めた。酒を飲むと恭司に向けて愚痴を並べたて泣いた。涙を流して泣くのは、恭司に對しての不満だけではなく、彼女なりにどうにもならない虚しさに逃げているようでもあった。恭司は、真美をことごとく傷つけ、真美が触れたものを嫌悪さえした。

人生なんてどうでもいいと言えばそれまでだが、恭司は、真美とのそれが嫌でたまらなかった。真美は、恭司に嘘を言っただけ、日常は勝手に流れ、精いっぱい関心を持っていたことをいとも簡単に、そうではなかったと否定し、真美は酒で体を麻痺させ、別れる別れないを繰り返した。真美とのいざこざは、恭司にとってこの上ない快感だった。わめき、叩き、髪の毛を掴んで引きずり回し、ろくでもない男になりさがって、アパートの部屋で、真美と自堕落な生活を受け、時折窓を開けて、「黒姫山」の姿形を見ている。

恭司は、ある夕方南の窓に向き、つぶさに前方の家々を見ていた。いつの間にか三月の半ばが来ていた。すぐ目の前の白いカーテンの横長の窓は、相変わらず一度もカーテンを開けたことがない。人が住んでいないのかと思うが、夜になると部屋に灯りが点っていることがある。よくよく見ていると、毎日遅くに灯りは点っているようで、それが隠れ灯のように見える時があり、奥の方でぼんやり点っているのがわかって、ベランダから少し左方に寄って見ると、その家の出っぱったベランダ部分が少し見える。時々、洗濯物を干しているのが見えることもある。その家の左横には、また別の家が小窓をこちらに向けて建っている。その左方に紅梅が咲いて、枝をさし出すように右に伸びている。紅梅の咲いている家は、恭司の部屋のベランダの真正面にあたる。中学生らしい女の子が帰宅するのを目にしたことがある。その家は、常に暗幕のような布が窓にはためいていた。左方は、山の斜面で竹ヤブが青い葉を見せ、そのすぐ下の斜面に、白壁の小さい家が建っている。夕方になると老婆がどこからか出てきて、前庭のわずかな菜園をいじっている。腰をかがめて畑の物をやたらと動かしている。その物置のような家に老婆以外は誰もいる様子はない。

北海道同人雑誌会議 延期

6月28日に札幌で予定しておりました北海道同人雑誌会議は、コロナウィルス自粛のため、延期となりました。まことに申し訳ございません。また、自粛解除などを見ながら、いつにするかをあらためて決めたいと思います。しばらくお待ちください。

文芸思潮
全国同人雑誌振興会

木木 32



同人雑誌 2019 木木の会



広島へ原爆投下に向かうB29の乗組員たち。殺戮の果てしない行進を辿るカンボジアの少年ポル・ポト兵。さらに平和な東京のマネキンを壊すアルバイトの中に潜む破壊の連鎖。破壊者たちの行進を追う新・破壊小説

アジア文化社



文豪の死には、作品を越えて人生に深く問いかけるものがある。文豪が残した最期の言葉——それは生きることの深さとその意味を投げかけてくる。文豪の赤裸々な魂に触れる貴重な遺言集。

アジア文化社

紅梅が透きとおって咲く昼、恭司は、「黒姫山」が、青い影となって明るい雲の下にすんなり佇んでいるのを見た。ベランダに立っていると、少しだけ覗き見える前のアパートの背後の家に洗濯物がまだ干されていて、風にはためく中で、チリチリンと風鈴の音がした。

上田が意味深に言う。
「そろそろだな」
「そうだな」
恭司は頷いた。

「例の風鈴はまだ鳴ってるか？」

上田は唐突に聞いた。
「風鈴？ いや、鳴らないよ。このごろは」
恭司は思い出したように言った。

「風鈴を鳴らす必要がなくなっただな」
上田は、妙な含みをもって笑った。

「気がつかなかったのか。あの『里村』の一品料理の居酒屋にいた頃、ゆき子さんが、すぐ傍の川辺のアパートに居たのを。ゆき子さん、あの近くのスーパーの惣菜売場で働いていたんだよ。毎晩『里村』の灯りを見にきて、あんた

が作る料理の匂いを嗅いで、川橋を行ったり来たりして。ほら、ここでもゆき子さん、すぐ目の前の、あのアパートに住んでいる。白いカーテンの、あのアパート。気付かなかったのか」
恭司が立ち上がって窓を開けると、白いカーテンの横長の窓の一つが、明るい灯りを点していた。
遠くに、「黒姫山」の山容が、闇の中にくうつすらと影をおいている。闇に尖った山の端が、女が黒髪を靡かせて立っているような、やさしげな気配を立てていた。

（「木木」32号より転載）



木山葉子

きやま ようこ

1941 兵庫県赤穂市生まれ
高知女子大学卒業
中学校教師を経て主婦
「木木」同人
好きな作家 大原富枝

木木

佐賀県

高レベルの文章家集団

同人雑誌「木木」は、唐津市に昭和六十三年に生まれました。第一号の発行は、昭和六十三年六月一日となっております。会員として二十五名が名を連ねています。男性も数人おりましたが、圧倒的に女性が多かったので、唐津市に女性による同人雑誌が誕生したと言われたのを覚えていません。昨年三十二号を発行しました。

佐賀県唐津市は、東は福岡、北は玄界灘、西は長崎、南は熊本に囲まれた、風光明媚な観光都市で、東経百三十度の子午線が通っています。この子午線は、木木三十二号の表紙の写真、松浦潟のほぼ真ん中を通り、かつ唐津市のほぼ中心を、南北に貫いています。特別名勝である虹の松原を突っ切り、唐津湾を北へ真つすぐに進み、北朝鮮、中国へと続き、南は鹿児島と続きます。

これは同級生が見出したもので、国土地理院の測量により、現在の県立唐津東高校の敷地の北東の角に、モニュメントが設置されています。脇を通る市道の、すぐ傍の交差点の信号には、東経百三十度という名前がつけられており、そこを通れば、同級生や同窓会が思い浮かべられ、どこと

なく懐かしく、優しい思いのする交差点です。また東経百三十度という名前のついた交番もあります。

近くには鏡神社があり、車で少し走れば、舞鶴城とも呼ばれる唐津城があります。唐津城を鶴の頭として、特別名勝の東の浜と、西の浜が、緩やかな弧を描いて、両翼のように玄界灘に向かって広がっています。ここ唐津は、古より大陸への玄関口でした。万葉集に幾つもの歌が詠まれています。

唐津藩は、第一代藩主寺沢志摩の守広高から、二代藩主堅高と続きましたが、堅高に嗣子がなく断絶しました。以後幕府の公領となり、明治維新を迎えました。

木木の会は、同人雑誌玄海派を主宰しておられた、松浦沢治先生の社会保険の文章講座「小説入門講座」より発足しました。講座の最後に出された、原稿用紙五枚の宿題を、せっかくだから発行しようという、先生の言葉によって、発行したのが始まりです。皆で木木という同人雑誌の名前を考え、それぞれにペンネームを考えたのが、懐かしく思い出されます。なにぶん素人ばかりで、どうすればよいのかわからず、玄海派の同人の皆様、古川工さんや、農民作家と言われた山下惣一さん達に、合評会の批評などで指導して頂きました。批評は辛く、それに耐えながらの発行でしたが、その後の懇親会は楽しいものでした。一号を発行すると、先生が一号だけではもったいないから、二号を発

木木



雑飾りの前での同人メンバーナップ

行しようとおっしゃいます。そのおかげで二号、三号と続き、一年に一回の発行を続け、現在に至っています。読み返せば、皆真摯に向き合い、よく書き続けたものだと感動します。

二〇〇三年、平成十五年に発行された、木木一六号に松浦先生への追悼文が載っております。心不全でした。先生は、お亡くなりになりましたが、先生が撒き、育てて下さった種が、私達「木木」の会員の意欲を引き出し、私達自身の人生を形づくるものとなりました。書くことにより、生涯の友を得、ふくよかな時を得ることが出来ました。

ペンの先から、せせり出せと言われた、先生の言葉をよく思い出します。木木が始まったばかりの頃の私は、まだ三十才を少し過ぎたばかりで、人生経験も少ないのに、そのようなことを言われても思ったことでした。

当時の文章を読むと、若々しく初々しい文章に目を見張り、はっとさせられます。失った時の重さに胸が痛むと同時に、書き続けた時の長さに感慨深いものがあります。

現在は、八人の会員となりました。昨年十二月に、医療法人修賢会の会長であった藤崎伸太先生がお亡くなりになりました。海軍兵学校あがりの、背筋のびんと伸びた先生の文章は、当時の世相がわかり、読めば感に堪えません。三十数年の時が経ち、皆年を重ねましたが、書く意欲が枯渇することはありません。書きたいと思う気持ちは、つ

あなたも 文藝家協会に入りませんか！

公益社団法人日本文藝家協会は創立90年を超える文学者団体です。著作権の保護、法律や税務に関する相談、健康保険、文学者の墓、『文藝年鑑』の編集などの活動を続けています。『文藝年鑑』に名前も記載されます。年に一度の総会で、作家の懇親会も催されます。

入会資格は「文芸的著述を主な活動としている」文学者です。プロの作家だけでなく同人誌で活躍されている方にも資格があります。理事などの推薦が必要ですが、活動を証明する同人誌のバックナンバーなどがあれば事務局で紹介します。

会費などの詳細については事務局にお問い合わせください。

公益社団法人 日本文藝家協会

〒102-8559

東京都千代田区紀尾井町 文藝春秋ビル新館5F

☎ 03-3265-9657 bungei@bungeika.or.jp

<http://www.bungeika.or.jp/>

木木

枯渴しない書く意欲

同人雑誌紹介

る一方ではないかと思えます。自分自身の生きた証を見出したい、自分の生を見つめたいと思う気持ちは、皆同じではないかと思えます。

合評会や食事会を通し、交流を深めています。年会費は、二万円。他に発行した同人雑誌の、使用したページ数による、割り当ての本の代金と、ページ負担金を頂いています。発行すれば、直ぐに支払が出来るようにし、発行した号で徴収した会費は、翌年の同人雑誌発行の費用として貯蓄しています。代表や会計は交代してきましたが、これを三十三数年繰り返して来ました。これからも松浦先生が、残して下さったものの重みを宝として、精進し、書き続けていきたいと思っています。

(木木の会／林 絹子)

木木の会

〒八四七・〇〇二二 佐賀県唐津市鏡61・1

林 絹子

TEL 0955・77・4156



前列左から、水木扶美さん、井上幸子さん、下川内遥さん、後列左から樋渡喜美子さん、主宰者林絹子、稲葉けい子さん、井上良子さん、後列枠内は故藤崎伸太前会長 2020年3月16日食事会にて

た い ま

当麻曼茶羅

桑山靖子

I

奈津子は数日前からお腹が張り、時々腹痛もしていたが、今日は定期の診察日だったのでその時先生に相談してみようと思っていた。会社には大事をとって休暇届けを出してきていた。夫が朝早く出勤した後、しばらく横になっていたが、洗濯物のことが気になりだして起き上がろうとしたとき、突然激痛がしたかと思うと、その場に倒れ込んで大量の出血をしてしまった。

夢中で携帯を取り出し、近所の友人に助けを求めたまでは記憶があったが、その後のことはまったく覚えていなかった。救急車で病院に運ばれ、帝王切開でやっと子供が刺さっていた。

奈津子は今どこにいるのか、とつさに判断できなかった。しかしベッド上で石のように重くなっている身体にふれて、ここが病院であることがやっと理解できた。

「赤ちゃん生まれたの？ どこにいるの？」

奈津子のささやき声に、母親は顔をほころばせながら、「ああ、目が覚めたね。奈津子わかるかい、お母さんだよ」と、手を握りしめた。

「赤ちゃん生まれたよ。小さくて保育器の中にいるんだけど、今克博さんがついていらっしやる」

と奈津子の目を見つめながら、話しかけた。奈津子はほっとして頷いた。

「赤ちゃん元気なのね。保育器の中にいるの？」

奈津子の質問に母親はためらいながらうつつむいた。しばらくすると、連絡を受けた主治医が診察に訪れた。

「よかったです。気がつきましたね。救急車で来られた時は、本当に危険な状態だったのですよ。もう大丈夫です。赤ちゃんは保育器の中にいますが、七か月に入ったばかりなので、小さくてとても危険です。子供病院に搬送しています」

奈津子は医師の言葉を聞いて、泣き出しそうになりながら訴えた。

「お願いです。赤ちゃんを助けてください。赤ちゃんを……」

出産できたようだが……。貧血がひどく、かなり危険な状態が続いたらしい。

その間、奈津子の意識は暗いトンネルの中を長い間さまざいつづけていた。そこは幼い日祖母につれられて行ったお寺の中のようなだった。鬼や地藏菩薩や痩せ衰えた子供たちがたくさんいた。いつか掛け軸の絵で見た賽の河原だったかもしれない。奈津子は寒さに震えながら、裸足で河原をさまざいつづけていた。

奈津子の意識がもどってきたのは次の日の明け方だった。誰かが必至で呼びかける声に、やっとの思いで目を開いた。ベッドの横に立って奈津子の顔を覗きこんでいる母親と目があった。口には酸素マスクがつけられ、腕には点滴の針

子供の顔を見ることが出来ないを知って、突然不安が押し寄せてきた。どうか生きていて欲しいと、祈る思いだった。

医師は領きながら脈拍をとり、聴診器で簡単な診察をした後部屋を出て行った。

「気がついてよかったです。気分はどうだい？」

母親は、奈津子の顔を見つめながら目を真っ赤にしている。

「頑張って元気にならないと、赤ちゃんがいるのだからね」

母親は奈津子の手をまた強く握りしめた。

奈津子は少し落ち着きをとり戻してくると、飛び出してきた家のことや赤ちゃんの着物のことが気になり始めた。

「ベビー服は、私の部屋の衣装ケースの中にあるんだけど。克博さんに頼んでもってきてもらって」

奈津子ほもつと早く準備しておくべきだったと思われる。

「お母さん赤ちゃん見たの。男の子だった？」

母親はいまいに頷いて、何も言わなかった。奈津子は、それから会社のことや、お世話になった友人のことなどいろいろ思いを巡らせていった。

次の日、医師から「赤ちゃんは、子供病院に入院している」と聞かされたので、「応安心した。また自分が元気になるまで会えないと納得していた。救急車を呼んでくれた

友人からは、「子供がいるのでお見舞いに行けなくてご免なさい」と言つて、花束と手紙が届けられた。また気になっていた会社には、夫が直接訪ねて出産届を出してくれたい。母親は奈津子の様態が安定したので、「一度家に帰って準備をしてくる」と言つて、その日の午後には帰って行った。夫は会社が忙しいらしく、これから出張に出かけるのだという慌ただしい時間帯や、会議が早く終わったので寄つたのだと言つて夕食の時間に訪ねてくるが多かった。奈津子は一番気になっている赤ん坊のことをゆっくり尋ねる時間がなかった。

帰り始めている夫に「赤ちゃん大きくなっている？」と思ひ切つて尋ねてみると、彼はドアノブに手を掛けたまま頷いて、「君も、順調に良くなっているから、もう一週間もすれば退院できるね」と答えただけだった。

彼の後姿を見送りつつ、奈津子は複雑な思いにかられるのだった。そして夫は忙しいのでいらいらしているのだらうと、自分に言い聞かせた。

会社勤めの慌ただしい日々が、数日前の現実だったとは思えないほど、病院ではゆったりとした時間が流れていた。南向きの病室の窓からマロニエの大木と新興住宅の幾つかの屋根が見えた。色も形もさまざまな住宅は、幾何学模様を作つて、空間をデザインしているように感じた。朝陽を浴びると、いろいろな形の屋根に光が反射してきらきら輝

ていった。

奈津子が入院して初めての日曜日がやつてきた。体調もかなりよくなったためか、朝から家のことが気になり始めていた。取り散らかしたまま入院してしまつたマンションの部屋は、大変な状態のままだろうと……。夫は夜遅く帰つて洗濯をちゃんとしているのだろうか。つぎつぎと心配になつてくるのだつた。

病院は朝から面会が許可されているので、廊下はいつもより騒がしかった。両隣の部屋からは楽しそうな雑談や笑い声が聞こえてきた。もしかすると会社の友人が来てくれるかもしれないと、淡い期待を持っていた。

その時ドアがノックされた。奈津子が「どうぞ」と返事をしても反応がない。しばらくすると、ドアがゆっくり開けられ、夫の克博が花束を持って入ってきた。

「どうしたの？ ええっ！ 花束買って来てくれたの？」

奈津子はあまりにも予期しない夫の行動に嘩然としていた。花束を受け取りながら、

「ありがとう。今日はどうしたの？」

と、尋ねざるをえなかつた。夫はばつが悪そうな顔を示しながら、奈津子の顔を見続けた。奈津子は気づまりになつて、また口を開いた。

「赤ちゃんのこと、とても心配なんだけど、順調に大きく

いた。奈津子は朝目が覚めてから、看護師が巡回してくるまで、その光のショーを見るのが楽しみだった。赤ん坊のことをいろいろ心配するのをやめようと自分に言い聞かせていた。

そんな平穏な一日の中で、唯一の訪問者と言えば午後回診に訪れる主治医だった。

「食欲はありますか？ しつかり食べて体力をつけてください。手術の傷は順調に良くなっていますよ」

奈津子の顔を見つめながら、話しかけてきた。白髪まじりの浅黒い顔の医師は、自信ありげな笑みを浮かべていた。奈津子はとっさに日ごろの不安な思いを医師につけてみた。

「先生、大きくなっていますか？ 赤ちゃんはいつになったらあえるのでしょうか？」

医師は奈津子の顔を見つめた後、特有の難しい顔をして、「七か月に満たない虚弱児は、現代の医学にしてもかなり難しいんですよ」

と、言葉を濁したまま出て行った。

奈津子にはぐらかされたような不安と疑念が、心の中で渦巻きはじめた。医師は赤ん坊と会わない方がいいと言っているように思えてならなかった。未熟児で危篤状態が続いているのだろうか？ もし助かってもいろいろ障害の残る子供になると言っているのだろうか。ますます不安が募つ

なっているのかしら、昨日院長先生に尋ねただけど、とても難しいようにおっしゃったわ」

夫は俯いたまま、花束を見つめ続けている。

「こっちの椅子に座って」

奈津子がベッドの横に置かれた椅子を指差した。夫はいつもおどおどして、椅子に腰を下ろすと、奈津子の手を握りしめた。

「奈津子、今まで黙っていて悪かつた。赤ちゃんは子供病院に運んでもらつたんだが、肺の機能が弱く三日目に亡くなった。君の意識の戻つた次の日だった。主治医と相談して、君に会わせないまま茶毘にふしたんだ」

奈津子は夫のことばが、どこか遠いところから響いてくるような気がしていた。目の前が真っ暗になり、自分の意識が薄暗いトンネルの中に潜りこもうとしているのを感じていた。悲しいと言ひ思ひもこみ上げて来ず、涙も出なかつた。ただ一点を見つめたまま、心の中を駆け巡る不思議な感覚に耐えていた。それは恐怖と言おうか、これから襲ってくる衝撃に耐えねばならないという思いだった。ぬめぬめとしたどす黒い不安が奈津子を包み込みもうとしていた。

薄暗い寒々とした河原に奈津子はひとり立っていた。足もとをひたひたと水が流れている。ザーという音に振り返ると、すぐ後ろを川が流れていた。水量は多くないが、か

なり激しい流れだ。ざわざわと人の声らしきものが聞こえてくるので、目を凝らすと、誰だかわからないが沢山の顔が、薄明かりの中に浮かんできた。河原に大勢の人がたむろしている。大半が子供のようには思えた。

どこかで赤ん坊の泣き声がしている。弱々しい泣き声は、だんだんか細くなり、虫の息のようでそれでも泣き続けている。……そうだ私の生んだ赤ちゃんのだと気付いた奈津子は、立ち上がりふらふらしながら、泣き声のするあたりを探しまわった。すぐそばで泣き声が聞こえるのに、どんなに手さぐりで探しても見つからない。その時、突然薄暗い霧のかかった地面に光がさしてきて、彼女の直ぐ眼の前に赤ん坊の顔が浮かびあがってきた。生まれたばかりの赤みを帯びた肌が紫色にかわりつつあった。目、鼻、顎が見え、震えている。奈津子が手を差し伸べようとすると、川底のあたりから突然白い霧が湧き出してきて赤ん坊の顔がだんだん消えていく。奈津子は霧の中に手を伸ばし、夢中になって赤ん坊を探し続けた。「赤ちゃんが死んでしまふ」と泣きながら叫び続けた。いくら探しても、その姿が見つからないまま時間が過ぎていった。まわりの霧がだんだん濃くなってきて、河原も、ざわめいていた人々もすっぽりと白い霧で覆われてしまった。

「奈津子さん、奈津子さん、どうされたのですか。どこか痛いのですか？」

腹部の診察を始めた。高熱でけだるい身体に医師の冷たい手の触感が心地よかった。水枕が敷かれ、腕に点滴の針が刺されると、奈津子は再び眠りの世界に潜り込んでいった。

また白い霧が一面に流れていた。奈津子はその白濁してほとんどなにも見えない畦道を、何かを探し出さねばならないと焦りながら歩いていた。それは霧の中に消えてしまった赤ん坊だったような気もするのだが……。重い身体を引きずるように進んでいくと、どこかで眺めたことのある雑木林が霧の合間から顔を出してきた。その向こうに奈津子の実家の庭に植えられていた櫻の大ききり見え始めた。その大木の周りだけ霧が薄れていて、木の葉が揺れているのも見える。

奈津子は懐かしくなり櫻の木にむかって必至で歩き続けた。幼い頃のお月見の夜の光景がありありと浮かんでくる。縁側に薄と萩がいけられ、お団子がお供えされている。月が昇るのを、お友達と歌を歌いながら待っている、突然櫻の間から黄色いまん丸い月が顔をだした。するとまわりがだんだん明るくなり始める。

奈津子は目の前に見える櫻の木に吸い寄せられるように歩き続けた。しかしいくら歩いても櫻の大木にはたどり着けなかった。だんだん夜が更けてきたのだろう、寒々としてきた。

看護師の呼び声で我に返った奈津子は、自分が病院のベッドの上で眠っていることにやっと気づいた。

「どうされましたか？ かなりうなされていらっしやったのですよ」

奈津子は目を開けてあたりを見回した。悪寒がして、頭がずきずきする。

「赤ちゃんがそこにいたの。でも私が抱こうとしたら、消えて行ってしまったの」

彼女はまだ河原に立っていて、ごつごつした岩肌から赤ん坊の泣き声がしているような気がするのだった。

奈津子の異常に気付いて駆け込んできた二人の看護師は、額に手を当てたり脈拍をとったりしながら、何か小声で相談していた。すると一人の看護師が足早に出て行った。

「奈津子さん、この部屋には赤ちゃんは連れてきていませぬよ。赤ちゃんは保育室にいるんですよ」

中年の看護師は奈津子の顔を見つめ手を握りしめながら、優しく微笑みかけた。

「大丈夫ですよ。ゆっくり眠ってください。そう、夕食を食べていないのでお腹がすいたのではありませんか」

虚脱感と、腹部の激痛に耐えられなくなり、奈津子の意識はまたもうろうとしてきた。

男性の呼びかける声に目を開けると、医師が目の前に立っていた。彼は看護師にいろいろ指示した後、奈津子の

奈津子はやっと実家の古びた茅葺の家にたどり着いた。

もう何年も前に家も前栽も解体されてしまったはずなのに……。ふらふらした足取りで、奥に入っていくと、目の前を亡くなった家族が、昔のまんまの姿で現れた。あの櫻の木に登って蟬取りをしていた兄の赤銅色に日焼けした顔も、父が野良着姿で畑に出かけていく姿も。いつも茶の間に座っていて、絵本を読んでいた祖母の少し猫背の姿も……。この家で亡くなっていった人たちが浮かんできてはまた消えて行った。

どこからともなくご詠歌が聞こえてきた。規則正しい鉦の音が共鳴している。哀調をおびた歌詞があたりを包み込んでいった。いつの間にか奈津子は河原に佇んでいた。

がりがりに痩せ衰え、髪の毛を逆立てている子供たちが、石を積み上げている光景が霧の向こうに見える。あれはどこかで見た覚えがある……。そうだ地蔵盆の夜お寺の納骨堂で祖母と眺めた掛け軸の光景なんだ。

「お地藏さんにお祈りをしないとあかんよ。赤ちゃんや子供は小さくて三途の川が渡れへんから。お地藏さんにお布施をして、渡してもらわんとあの世にいけへんのやで」

祖母の声がどこからともなく響いてきた。奈津子は切れ切れの夢をいくつも見ながら、トンネルの中をさ迷い続けていた。ことばになりきれない想いがとめどなく溢れてくる。ただどうしようもないことをしてし

まったという、後悔だけが何度もこみ上げてくるのだった。

奈津子の様態はその後一進一退を繰り返し、なかなか回復しなかった。産褥熱が下がっても食欲がわかず、悪阻のように食べ物を口にするに吐き気を催した。胃の検査をしても原因がわからず、医師は精神的なものだろうと言いつつ首をかしげた。

奈津子は極端に口数が少なくなり、すべてのことに意欲を失っていった。克博が買って来てくれた携帯ラジオも聞こうとはしなかった。他人の会話やことばが煩わしく、それを理解しようという意欲を失ってしまった。それらはすべて不快な騒音であり、ラジオも不快な雑音を流す箱に思えるのだ。

それでも担当の医師や看護師とは、最小限のやりとりはできていた。しかしそれ以外ではできるだけことばにかかわらずに過ごそうとしていた。ほんやりと天井をみつめながら一日中ベッドに横たわっていた。考えることも思い出すことも極力避けながら……。

それでも太陽が射し込む時間帯は窓を開け、大空の彼方をいつまでも眺め続けた。窓枠に切り取られた空を無心に眺めていると、奈津子が空と同化してしまったような安らぎが得られた。それが気持ちを平穩に保つためのたった一つの方法だった。

II

どんなに考えても、奈津子は大切な子供の命を奪ってしまったという悔恨と懺悔から、逃れられなかった。そのことに触れようとすると、途端に胸が苦しくなり、肉体を大鈍で切り刻まれるような苦痛に襲われるのだ。悪魔のような暴風が思考の隅々までなだれ込み、奈津子を虚無と徒労感の海に埋没させていった。一度悪魔の襲撃を受けると、奈津子は長い間立ち直れなかった。

二週間が過ぎて手術の傷はよくなったが、奈津子の様態は改善されなかった。とりあえず退院することになったが、医師から心療内科を紹介され、治療をうけるように勧められた。奈津子の身体はかなり衰弱していたので、まだ自宅に戻っても家事をこなすことは不可能に近かった。それにも増して奈津子は自宅マンションに帰ることを恐れていた。赤ん坊を失う原因になった破水のショックが大きく、それを思い出す場所には決して住めないと思うのだった。

「もうあのマンションに帰れない。あの日のことが思い出されて……」

と奈津子が訴えるので、夫と母親の話し合いの上、しばらく奈津子は実家に戻って養生することになった。勤めている会社には夫が仔細を説明し、半年間の病欠を出してきてくれた。

奈津子は身体が良くなるまで母親の住む田舎に帰ることになった。彼女が生まれ育った家はもう取り壊され、樗の大木だけがかるうじて残っていた。その大木に守られるように、小さな母親の新居が建っている。思い出の実家がなくなっても、田舎の風景は奈津子をそっと包み込んでくれた。ただ村の人たちに出会い、自分の近況を話すのが辛かったので、一日中居間のソファに座って、鎮守の森や田圃をながめていた。母親に家事一切をまかせた日々は、幼いころに帰ったように心が安らいだ。心地よい風に吹かれながら小鳥のさえずりを聞いていると、いつの間にかうたたねをしてしまうことがあった。夢の中にいつも亡くなった祖母や父親が出てきた。

……奈津子は祖母と村の氏神さんにお参りしていた。とつぶり日が暮れてしまい、まだ月が昇っていない畦道は真っ暗だった。懐中電灯を一つもって、奈津子が道を照らししていく。秋の収穫が終わり新嘗祭になると、奈津子の村では新米で大豆御飯を焚いて氏神さんにお供えするのが慣わしだった。暗闇の畦道を長い間歩き続け、夜露で足も手が冷たくなってきたころやとと大歳神社の森にたどり着いた。石段を登っていくと両側の雑木林が、風もないのにざわざわと音を立てる。鳥居の向こうに灯りが揺らいでいるのがやっと思え始めた。

「もうだれもお参りしとるんや」

祖母はそう呟くと足早に石段を登りはじめた。奈津子は必死で後ろを追っかけていった。暗闇の中で木の葉がざわめいたり、「ホウ、ホウ」という梟の鳴き声が、森の奥から聞こえてくる。奈津子は恐ろしさのあまり祖母の着物にしがみついた。折敷に盛られた大豆御飯をお供えして祖母がお祈りをしている間、拜殿に灯された蠟燭の炎が揺れるのをじっと見つめていた。炎に照らしたされる拜殿の奥には恐ろしい神様がいらっしゃるのだと奈津子は想像していた。

帰り道の暗闇はますます恐怖心をそそられ、祖母の手につかまりながら石段を一つまた一つと下りて行った。

その時、突然奈津子の目の前を青白い炎のような塊が尾を引きながら飛びさった。その炎はだんだん小さくなりながら、鎮守の森の向こうに消えていった。恐ろしさのあまり、「おばあちゃん、あれは何、燃えとるみたい。あの青白い火はなに？」

と、奈津子は叫び声をあげた。

「あそこは、お墓のある所や。人魂かもしれない」

と、青白い炎の消えて行った辺りを眺めながら呟いた。祖母もその炎を見つけていたようだ。

「人魂？ あれが人魂言うの？ 怖い！ こっちにこうへんね」

奈津子は必死で祖母の手にしがみつきながら、叫んでい

た。……

自分の叫び声で目覚めてみると、奈津子は手を固く握りしめていた。今しがたまで祖母にしがみついていた感触が残っている。あの夢で見たような体験はたしかにあったような気がするのだ。その時、祖母が語ってくれた恐ろしい話が次々と思ひ出されてきた。

「人が死ぬことになる、まだ息のあるうちに魂だけが抜け出して、山の中にあるお墓にいくそうや。その魂を人魂ゆうて、青白く光っているんや。人魂は家族との別れがつかなくて、自分の家の屋根の周りを飛び回るそうや。そやけど身内の人には見えへんのや。夜暗闇の中を歩いている他人には見えることがあるらしい」

その真剣な祖母の顔がありありと甦って来て、今もそばに立っているようにさえ思われてきた。人魂ということばを久しぶりに思い出した奈津子は、懐かしさが込み上げてくると同時に、背筋がぞつとする恐ろしさを感じた。

奈津子の亡くした赤ん坊の人魂は、どこに行つたのだろうか。お腹の中にいるときに抜け出していたのだろうか、あの幼い人魂は迷ってしまったていないだろうか。

そこまで考えると、いつもの不安が襲ってきて、奈津子の心は逃げ場のない悔恨にがんじがらめにされてしまった。どこからか祖母の「奈津子、これがご先祖さまだよ」とい

う声が聞こえてきたような気がした。ふらふらと立ち上がり、いつの間にか仏壇の前まで歩いてきていた。昔の家の奥座敷にあったどっしりと構えの仏壇ではないが、新しい母の新居にふさわしい、こじんまりしたいぶし銀色の仏壇だ。扉を開くと沢山ののお位牌が並んでいる。何代にもわたるご先祖のものだ。その奥に見覚えのある掛け軸が掛けられている。赤茶けた仏さまの顔が描かれていた。奈津子

その前に正座をして手を合わせていると、熱いものが込み上げてきて涙が頬をつたった。

「ご先祖さま、奈津子の赤ちゃんが亡くなりました。生まれたばかりの赤ちゃんです。どうか導いてやってください」

いつの間にか、祖母の口調でお参りしている自分に気がついた。奈津子はいつまでも仏壇に顔が覗いていた。

奈津子の意識は現実から遊離してしまつて、食べることも眠ることも、もうどうでもよくなつていた。頭の中は亡くなつた赤ん坊のことで一杯だった。確かに自分のお腹に宿っていた赤ん坊、その姿は病院のエコーでしっかりと見つけて来たのだ。もうすぐ自分の手で抱きしめることが出来ると思っていたのに、突然消え去ってしまった。自分の不注意で死なせてしまったのだ。

あの赤ん坊はどこに行つてしまったのだろうか。奈津子は必死で赤ん坊を捜し求めていた。肉体が消滅してしまつて

も何かこの世に生まれてきた命の「あかし」があるのではないだろうか。

悔恨と懺悔に悩まされ続けている奈津子に、うたた寝の夢の中に現れた青白い炎は、遠い記憶の中へ彼女を導いていった。そして心の奥深くに眠っていた幾つもの思い出を呼び覚ましていくのだった。

明かりの灯つた提灯が広場の周りを、電柱や植木に巻きつけながら何重にも取り巻いていた。その中央にはひとときわ明るい提灯で飾られた櫓が建てられ、拡声器からは哀調をおびた盆踊り歌がつきつきと流れてきた。八月の二十三日の夜は、地藏盆の盆踊り大会がお寺の境内で村総出の行事として行われた。

お寺の入り口には綿あめやアイスキャンデー、ヨーヨー釣りのお店が数軒出ていて、大変賑わっていた。直ぐそばの畔道から数発の打ち上げ火花が揚がる年もあった。村の老若男女がお寺に集まってきて、夏の終わりを楽しんでいった。

櫓の周りでは、浴衣姿の婦人会や老人会のおばさんを中心に、夜遅くまで盆踊りが続けられた。子供たちも輪の中に入れてもらって、見よう見まねで踊り続けた。一番の楽しみは、ジュースやコーンやお煎餅のはいったお接待をもらうことだった。

祖母は村の念仏講に入っていたので、お昼過ぎからお寺

に集まっている準備をしていた。仕事が一段落する頃、講の人達が本堂の観音様の前に集まって、お坊さんから説教を聞き、ご詠歌を長い間唱えるのだった。奈津子はいつも祖母について来ていたので、本堂の隅で本を読みながら盆踊りが始まるのを待っていた。

ご詠歌の途中でトイレに行きたくなった奈津子は、祖母に本堂の奥にあるトイレに連れて行ってもらった。そこは納骨堂の入り口になっていて、壁一面に「地獄絵図と仏さま」を描いた掛け軸が掛かっていた。その絵が恐ろしくて駆け足で通り過ぎようとした。後ろを歩いている祖母が、一つの掛け軸の前に立ち止まって、奈津子を呼ぶのだった。「奈津子、この絵をよう見してみ。これがお地藏さんなんや。奈津ちゃんのような子供が亡くなると三途の川が一人で渡れんから、賽の河原で石を積んでお布施にするんや。ほら子供が石を積んでるや。お地藏さんに助けてもらうて、やつとあの世に行くんや。お地藏さんは子供の守り神やから、奈津子もしっかりお拜むんやで」

祖母は奈津子の手をぎゅっと握りしめて、話してくれた。あの日の祖母のことばが、ありありと甦ってきた。

赤ん坊の写真や映像が流れてくるのを恐れて、奈津子は近頃新聞を読むことも、テレビを見ることもほとんどな

かった。その日母がドラマを見た後、テレビをつけたままにしていた。夕食後菓を飲むために、居間のソファーに湯のみを持って行くと、「古寺探訪」というお寺巡りの番組が始まったところだった。奈津子はお寺ということばに引かれて、テレビを見る気になった。

仄暗いお堂の中で女性がひとり合掌している姿が、画面に映し出されていた。その前には大きな衝立つたてのようなものがあり、そこにたくさんの仏さまが描かれていた。衝立の表面が鮮明に見えないのは、長い年月を経て色彩がはげ落ちたためだろう。

「これが、曼荼羅なんですね。あの中将姫が蓮の織維で織られたという。すごく大きなものですね。私はもつとコンパクトなものを想像していました」

個性的な演技で定評のある女優が、法衣をまとった住職に語りかけていた。

「これが御本尊の当麻曼荼羅たいまです。今お祀りまつらしておりますのは、文亀年間に転写されたものです。中将姫が織られたという古曼荼羅は国宝に指定されておりまして、ただ今は宝蔵に収められております」

奈津子は画面にくぎ付けになった。テレビカメラは曼荼羅の正面を映していたが、しだいに横の方角に下がっていき、曼荼羅が収められている厨子くしの側面から撮りはじめた。厨子の高さは四メートル近くあり、お堂の天井に届き

洗面や入浴もおっくうがってまともにしない奈津子が、次の日からパソコンに向かって当麻曼荼羅を調べ始めた。一日中横たわっていたソファーから起き上がり、テーブルの上にパソコンを持ってきて、インターネットで検索し続けた。

パソコンの画面に映し出された曼荼羅の赤茶けた色彩とおぼろげな輪郭しか見えない仏さまの顔を奈津子は一日中見つめていた。すると奈津子の心の奥深くそのお顔が潜り込んできて、あの夢の中で祖母の手を握りしめていた安らぎを感じさせてくれるのだった。いつの間にかそのお顔は、幼い日お寺で見つめたお地藏さんの掛け軸のお顔と重なっていた。

ソファーに横たわって目を瞑っていても、当麻寺の曼荼羅が甦よみがえってきて、仏さまのお顔が目の前に浮かんでくることがあった。奈津子は曼荼羅に呼ばれているような思いがし始めていた。一度お参りして自分の目で、中将姫の織られた曼荼羅を見なければならぬと思うようになっていた。

実家に帰ってからの奈津子は、二週間に一度心療内科に通院する以外は、居間のソファーに横たわったまま一日を過ごしていた。食事の準備はおろか、自分の身だしなみさえ気にしない自堕落な毎日だった。

そんな彼女が突然奈良にある当麻寺にお参りすると言い

そうな巨大なものだった。黒漆地に金箔きんぱく泥絵で花喰い鳥や宝相華文ほうそうけもんが描かれていたようだが、それらの模様は薄くなり、今ではいぶし銀色に鈍く輝いている。カメラアングルが正面にもどり、ズーム・アップされても曼荼羅はあまり鮮明に見えなかった。

茶色く変色し、おぼろげな輪郭しか見えない仏さまのお顔、渦巻くように並んだ仏さまの顔、顔、顔、奈津子は無意識にその画面に吸い寄せられていった。心の奥深くから、懐かしさとも安らぎともつかない想いが、こみあげてくる。「中将姫さまは篤い信仰心をお持ちの方でして、いろいろな苦難を乗り越えられて、女人禁制の当麻寺に入山が許されたのであります。この曼荼羅を一夜にして織られたと伝えられております」

と住職の説明を聞いた女優は、

「曼荼羅の前に座りお祈りをしていると、とても安らかな心境になりますね」

正面に正座して曼荼羅を見上げながら、女優は静かに話した。

女優の端正な横顔がアップされると、奈津子は中将姫がそこに現れたような錯覚をおぼえてしまった。そして奈津子も曼荼羅にやさしく包み込まれるような気持ちになっていくのだった。

だったので、母親は困惑してしまったようだ。電車を乗り継ぎ片道二時間以上もかかる距離をたった一人で行けるのだろうか。途中で気分が悪くなり、倒れるようなことがあればどうするのだろうかと心配で仕方がなかったが、奈津子は「一人でお参りする」と言って聞かなかった。

十月も半ばを過ぎたとはいえ残暑の厳しい中、奈津子は朝早く家を出発した。母親が心配そうに見守る中、いつもよりテキパキと準備ができたし、パソコンで電車の時間を調べ、帰宅時間の予定表を玄関で見送ってくれた母親に渡すこともできた。

ラッシュ時の大阪駅の雑踏にもまれながら、やっとの思いで環状線に乗り、近鉄の難波線に乗り換えることができた。電車の中でほっと一息つく、疲れがどっと押し寄せて来たが、久しぶりに通勤時間帯に電車に一人で乗れたことが嬉しかった。

電車が市街地を抜けると、車窓の風景は一転してのどかな田園風景に変わっていった。稲刈りを終えた田圃が続き、切株の懐かしい匂いが漂ってくるような気がした。まだ刈り取られていない田圃には稲穂が波打っている。田舎育ちの奈津子は黄金色の稲穂が太陽に照らされきらきら輝いているのを見ると、心が和んできた。奈津子は久しぶりに穏やかな気持ちで田圃を見つめていた。

電車が左にカーブすると、山が線路まで迫って来た。楓

の何本かはもう葉っぱが紅葉し始めているようで、雑木林は淡い色彩を帯びている。自然の風景を眺めていると、奈津子を縛り付けている重苦しい呪縛から解き放たれ、心が安らいでいった。

車内は遺跡めぐりに奈良を訪れているグループが次々と下車して行き、いつの間にか老人が数人乗っているばかりとなった。奈津子は車内放送に注意しながら当麻駅が来るのを待っていた。

線路沿いに住宅が建ち並んでくると電車は徐行し始めた。市街地をしばらく進むと今までより少し大きな駅に到着した。「当麻寺、当麻寺」というアナウンスに奈津子はホームに降りた。地元の数人の客とリュックサックにスニーカーの夫婦も一緒だった。

駅前を幹線道路が通っていて、餅屋などの商店が並んでいる。その道をしばらく進むと、当麻寺に向かって参道が伸びているのが見えてきた。

参道を上りつめると、目の前に荘厳な仁王門がそびえ立っている。その門を潜ると視界は一転した。正面にはなだらかな稜線が所なり、空との境目に、まるで二つの瘤を背負った駱駝のような形をした山が並んでいた。有名な二上山のようだ。はるか向こうの山裾までの広大な土地が寺院の敷地になっているらしく、深い雑木林に伽藍や塔がいくつも顔を出している。呆然と眺めている奈津子はいつ

のまにか異境を訪れた気持ちになっていた。

しばらく進むと、本堂の前にひっそりと佇む中将姫の石像が目に入ってきた。奈津子はその端正な中将姫のお顔を眺めた後、順路に従って曼茶羅の祀られている本堂に向かった。

あの曼陀羅をこの目で拝することができると思うだけで、心はがやってくる。奈津子は燦し銀色に輝く本堂の格子戸の前で合掌した後、黒光りする板敷の間に上がった。その中央に見上げるばかりの厨子がどっしりと安置されている。背が高く厚みのある大きな衝立のような厨子には威圧感さえ感じた。拝観者の波にのって薄暗い照明のなかを厨子の前に進んでいった。その正面に佇んだ奈津子は合掌して祈ることさえ忘れてしまつて、仄かな明かりの中にかびあがつてくる仏の世界を見つめつづけた。光輪をつけた柔和なお顔の仏さまが一面に描かれている。曼茶羅の風化した色遣いが、仏画独特の雰囲気醸し出し、奈津子の魂を包み込んでいった。

「画面中央から阿弥陀さま、観音さま、勢至菩薩ら三十七尊や楼閣、宝池など極楽のありさまが壮麗に描き出されています」

スピーカーから流れてくる曼茶羅の説明がこだまのように奈津子の心に響いてきた。

その仏さまたちを見つめていると、奈津子の意識はどこ

か遠いところに連れて行かれるようだった。崇高ななかに包み込まれ、うっとりとした安らぎに心は満ちていた。数分もそうしていただろうか。

ふと周りの人の気配で我に返った奈津子は、合掌した後テレビで見た女優が住職と対談していた場所を探し始めた。中将姫が現れたように感じた美しい女優の傍を、奈津子は無意識に探していた。この曼茶羅を蓮の織維で織つたという女性を、心の奥深くに求め始めていたのかもしれない。今日は参拝客が次々と通り過ぎるので、その場所をゆつくり確かめることはできなかった。しばらく進んでいくと、曼茶羅厨子の横に小さな黒塗りのお堂のようなものが置かれていることに気付いた。その中に白い頭巾をかぶり、目がぱっちりした中将姫が祀られている。奈津子は手を合わせながらテレビで映っていた女優のことを思い出していた。「このお姫さまは一夜にしてこの曼茶羅を織つたのですね」

テレビで見た姫の苦難の生涯を思うとき、奈津子の胸を熱いものが込み上げてきた。中将姫が求めていたもの、その荘厳な想いが伝わってくる。奈津子の心が渴望しているものと重なって……

奈津子は立ち去り難い思いを残しながら出口に進んで行った。昼を少し過ぎたところだったが、爽やかな風が線香の煙をなびかせながら吹いてくる。太陽が本堂の濡れ縁

いっぱい射しこんでいて、拝観を終わった人々が三々五々欄干にもたれながら、樹木の中にくつもの伽藍が顔を出す広い境内をながめていた。曼茶羅の仏さまに包まれてうっとりとしていた奈津子は、現世に連れ戻され日差しのまばゆさに瞬きをした。

朱印帳に記帳してもらおうと思ひ、受付に寄った。当麻寺の写真集や歴史のパンフレットが並べられている中に、折口信夫の没後六十周年を記念して特別展があると言う案内版が置かれていた。当麻寺の境内にある中の坊という別院で開催されているらしい。

『釈超空と死者の書』というタイトルが付いていた。今、本堂で拝してきたあの中将姫と、大津皇子を題材にした彼の代表作『死者の書』の初版本が展示されていると言う。

その他『死者の書』の資料や折口関連の所蔵品がいろいろ出品されているようだ。

奈津子は折口信夫という名前を見つけたとき、その不思議な巡りあわせにしばらく呆然としてしまった。学生時代、奈津子は折口信夫に熱中していた。卒論の資料集めに彼の本を求めて図書館を巡り歩いたこと、「国文学の発生」の論文を何度も書き直し、論旨を理解しようと努力したこと。万葉集は彼の『口訳万葉集』を愛読していたこと等々。懐かしさが込み上げてきて、どうしても見たいと思ひ始めた。ただ彼の著書に『死者の書』という小説があることは知っ

ていたが、読んだことはなかった。

それが今お参りしている当麻寺の中将姫の伝説をモデルに、彼が書いたと知って、益々興味をもった。当時追求していたものと、今彼女が希求してやまない曼茶羅が繋がっていたことを知り、不思議な巡り合わせを思うのだった。いや因縁のようなものさえ感じてしまった。ぜひその「特別展」を見て帰らねばならないと思った。

時計を見るともう帰らなければならない時間になっていく。心のどこかには、体調の良くない自分がこのまま見学を続けていだろうか。もう帰らないと大変なことになるかもしれないとも思えてくる。しかし今日の奈津子は、心に風穴があいたようで何事にも意欲的だった。

中之坊は折口にゆかりのあるお寺らしく、庭園の一角には釈超空（折口信夫）の歌碑も建っている。霊宝館の展示物は折口の自筆の書簡や写真、色紙や自作の歌の短冊、原稿用紙に書き込まれた作品の一部もあった。『死者の書』を書く資料となったらしい。「山越の阿弥陀図」という仏画の掛け軸も展示されていた。奈津子には仏画の意味が全く分からなかったが……。

展示会場を奥の方に進んでいくと、昭和十八年に発行されたという初版本の『死者の書』がガラスケースに入れられて展示されていた。装丁はいかにも昭和初期らしいものだが、説明によるとエジプトの死者の書をベースにされて速パソコンに向かった。展示場で出会った『死者の書』を早く手にいれたくて、ネットで注文することにした。

二日後に、注文していた『死者の書』が届いたので早速読み始めた。文章は感覚的で折口独特のユニークな描写だったし、場面が次々と展開して内容がなかなかつかめなかった。奈津子は曼茶羅にまつわる小説だと思って読み始めたが、不可思議な登場人物「彼の人」の出現で戸惑った。「彼の人の眠りは、徐かに覚めて行った。真っ黒い夜の中に、更に冷え圧するもの、澱んでゐるなかに、目のあいて来るのを覚えたのである。した。した。耳に伝ふやうに来るのは、水の垂れる音か。たゞ凍りつくやうな暗闇の中で、おのづと睫と睫とがはなれてくる」と書かれている。彼が暗闇の洞窟と思われる空間に目覚め始めるところから物語は始まっているのだ。冒頭から不思議な人物が登場していて、彼が何者なのか理解できなかったのが、戸惑いつつもしばらく読み続けた。

一ページ目を繰ると、突然光輪を着けた三体の仏さまの写真が掲載されている。奈津子はそのお姿をひと目見た時から、当麻曼茶羅の前にたたずんだときの感動が甦ってきた。自分の心の暗澹とした思いが、仏さまの柔和な表情や雰囲気に浄化され、その微笑みにすっぽりと包み込まれるような気がするのだ。

いるとかで、ピラミッドの壁画の絵文字を連想されるデザインが表紙に描かれていた。

中將姫の伝説は、一夜にして蓮糸で曼茶羅を織りあげ、その曼茶羅のようなご来迎を受けて極楽浄土に旅立ったと言う話なのだが……。折口信夫はどんなストーリーを展開しているのかとても興味が湧いてきた。

『死者の書』を読んでみたいという思いと、初版本の表紙のデザインがいつまでも心に残った。帰りの電車の中では、奈津子の赤ん坊の死と曼茶羅と、表紙の絵が頭の中でぐるぐるまわっていた。

奈津子が当麻寺から帰宅したのは、六時を過ぎていた。病院以外に外出したことがない奈津子があまりにも遅いので、落ち着かない様子で待っていた母親は顔を見るなり、「どうしたんだい？ 途中で調子がわるくなったのか心配で心配で……」

と、声をあげたが、奈津子がいっつもより元気そうなのを見て、ほっとしたようだった。

「当麻寺、やっぱりすごかったわ！ 当麻寺の別院で曼茶羅関連の展示があったので、その会場を見て来たから遅くなったの。メールくれたでしょ」

と言う奈津子のことばに、母親はそれ以上何も言わなかった。

夕食を済ました後、自分の部屋に引き上げた奈津子は早退院してから長い間鬱の中に閉じこもっていて、新聞すら手にすることがなかった。そんな奈津子が本を開いている姿に、母親は驚きを隠せないようだ。台所から食事ができたことを告げながら、奈津子のそばに寄って来て、「その本は、この前お参りした当麻寺のことが書いてあるのかい」

と、ページを覗きこんできた。

体調の良い日は長く続かなかった。周期的に不調の波が襲ってきて、奈津子は人が変わったように落ち込んでしまった。そんな日は『死者の書』を開く気になれず、ソファアに横たわったまま本の表紙を眺めていた。読みたいという気持ちはあるのだが、身体がついてこないのだ。

食事に呼ばれてもソファアから立ち上がるのさえおっくうだった。母親の強引なことばに促され、やっとの思いで食卓に着くことも多かった。彼女を元気づけようと工夫をこらして好物を作ってくれるのだが、食欲がまったく湧かない。食卓についても箸が進まず、長い時間をかけて、お皿に盛りつけられたものを無造作に飲み込んでいった。

一日中ソファアに横たわっていると、夜になってもなかなか寝つくことができない。寝室と居間を行ったり来たりしながら、地獄のような一晚を過ごさねばならなかった。そんなとき彼女の心を占領するのは、赤ん坊を死なせてし

まったことの悔恨だった。どうしてももう少し早く病院にいかなかったのだろう。前の日もお腹が張り違和感があったのに、会社を早退して病院に行けたのに……。あの日入院していれば早産は防げたはずなのに……。

どうにもならない練り言に奈津子の心は押しつぶされてしまふそうだった。暗闇の中で押し寄せてくる懺悔という恐怖の反復に奈津子はなすすべもなかった。

そんな夜は医師に処方してもらった錠剤を飲んだ。数時間まどろむことが一時のやすらぎとなった。

そのまどろみの中で不思議な夢を見ていた。

「こう、こう、こうーこう、こう、こう、こう」

奈津子是不気味な響きの啼き声のようなものを聞きながら、暗闇の森の中をたった一人で歩いていった。それは幼いころ兄と駆け廻って遊んだ鎮守の森のような気もするのだが、どこか違っていった。もっと深く樹木が鬱蒼としげっている山の中だ。

「こう、こう、こう、こう」

確かに人の声のような気もする。鳥の啼き声とは違う響きをしている。奈津子は立ち止まって辺りを窺ってみた。するとその声は止んでしまった。

……静寂は以前に増し、冴え返って張りきつてゐる。

……当麻路をこちらへ降つて来るらしい影が、見えだした。二つ三つ五つ……八つ九つ。九人の姿である。急な降り

一気に、この河内路へ駆けおりてくる。九人と言ふよりは、九柱の神であった。白い著作、白い髪、手は、足は、すべて旅の装束である。頭より上にでた杖をついて。この担に来て、森の前に立った。

こう、こう、こう。

誰の口からもなく、一時に出た叫びである。山々のこだまは、驚いて一様に、忙しく声を合わせた。だが、忽ち時の騷擾から、元の緘黙に戻ってしまった。

こう、こう、こう。お出なされ。藤原南家郎女の御魂。

こんな山奥に、迷うて居るものではない。早く、もとの身に戻れ。こう、こう。

お身さまの魂を、今、山たづね尋ねて、尋ねあてたおれたちぞよ。こう、こう、こう、……。

奈津子は南側の窓から射し込むまばゆい日差しにふと目が覚めた。

今、『死者の書』の一ページがありありと夢の中に出てきていた。奈津子は幼い時からよく経験することなのだ。が、愛読していた物語の世界に夢の中で潜入してしまうのだ。今日も中将姫が出奔した後、お屋敷の従者たちが夜中に「魂ごひ」の儀式をしている場面が、夢の中に出てきたのだろう。

枕元の時計を見ると、六時半を過ぎていた。いつになく

長く眠っていたようだ。奈津子はゆっくりベッドから降りると、昨夜カーテンを締め忘れていた窓に近づいた。その時かすかに「こう、こう」という鳴き声のようなものが聞こえてきた。窓を開けてみると、冷たい風がさつと吹き込んでくる。菜園の中に母親が飼っている鶏が数羽放たれていて、コッコッと鳴きながら草をついばんでいた。昨夜ケージに入れられたか、朝早く起きた母親が庭に放したのだろう。奈津子はパジャマのまま庭に降りて、鶏のそばに歩いて行った。今朝は少し眠ったせいか、気持ちが悪く落ちてきている。

「あなたの鳴き声が『魂ごひ』に聞こえたんだね」

奈津子は気忙しく嘴を動かし草をついばんでいる鶏に話しかけた。

鶏を見つめながら、夢のできごとを思い出していると、学生時代に読んだ折口信夫の著作の中のことばが次々と廻って来た。「魂ふり」や「魂ごひ」と言う奈津子が心をとぎめかせたことばが「魂の呪術的世界」と共に……。あの頃、日本人の魂の故郷である古代にあこがれ続け、そこに文学の発生を折口の著作を通じて求めようとしていた。

奈津子は幾つかのことばを、記憶をたよりに整理してみた。「魂ふり」は「魂に活力を与え再生させる呪術」で神道の中心をなす考え方であること。「魂ごひ」とは「生者や死者の魂が身体から遊離して山野をさ迷う時、その魂を

呼び寄せ、身体に鎮め繋ぎ止めておく呪術」であること。『死者の書』の中で「魂ごひ」ということばをみつけた時、奈津子の意識の奥深くで何かが、動き始めたような気がするのであった。

すがすがしい空気につつまれた朝の菜園に立って、はるか向こうに見える鎮守の森を長い間みつめていた。昨夜の夢からまだ覚め切っていないのだからだろう。心の奥深くから昔の人々への素朴な憧れが湧きあがってきた。

もし夢の中に出て来た九柱の神のように「魂ごひ」の儀式を行ってくれる人々がいるのなら、奈津子もその中に入つて、深夜の森をさ迷つてみたいと思つた。

「こう、こう、お出なされ。奈津子の赤ん坊のみ魂」

「こんな山奥に、迷っているものではない。はやく、もとの身に戻れ。こう、こう」

と、「魂ごひ」の儀式を行つてみたい。そこまで考えた時、胸の奥深くから熱いものが込み上げてきた。それは奈津子を四六時中襲ってくる赤ん坊への懺悔の想いではなく、もつと懐かしく優しいものだった。

しばらくすると、奈津子の脳裏にすすけたお堂と、歯が抜けてしまふ前歯が二本しかない老人の姿が浮かんできた。「そうだ。あの山伏さんなら、奈津子の願いを叶えてくれるかもしれない」と思いはじめた。その人は奈津子が幼い頃、村の外れの茅葺のお堂に一人で住んでいた仙人のよう

な老人だった。

あの山伏さんはもう亡くなっているだろう。奈津子は過ぎ去った月日を手繰ってみた。あの茅葺のお堂はどうなったのだろうか。高速道路が村を縦断してから人々の生活も一変してしまった。鎮守の森の北の方を走っている縦貫道路は夜でもこうこうと照明灯が輝いている。

あの森に棲んでいた狸や狐たちはどうしてしまったのだろうか。畑は道路にとられ、道路沿いの土地は耕作されず荒地のまま放置されている。パブル経済の波が押し寄せてきて、村人の多くがサラリーマンになり、都会へ働きに出るようになった。そして静かで貧しい村の伝統的な生活がすべて壊れてしまったのだ。

奈津子は幼い日に出会った山伏さんの思い出を手繰りよせていた。

秋の取り入れも終わり、初摺りと言って収穫したお米の初を取る共同作業が終わるころ、その山伏さんのお堂「加納院」で「護摩炊き」という行事が行われた。それは近隣の村の男性が入っている行者講の年中行事の一つだった。奈津子の家から鎮守の森を通り、一キロばかり山に入った所に山伏さんのお堂はあった。小さな茅葺の建物で、集落からかなり離れているため、夜になると狐や狸が出てくるという話だった。

護摩炊きの日は雑草の茂っていた広場がきれいに掃除さ

柱となって燃え上がった。

風向きによって煙が地面近くを這ったり、一方向ばかりに集中して流れていくことがあった。「煙に当たると、風邪をひかないとか、今年一年の穢れが払われる」と言っている村人は目を真つ赤にしながら煙に耐えていた。子供たちは「六根清浄」と唱えながら、煙の流れる方向を見定めて逃げ回った。夕日が西に傾きはじめるころ、護摩炊きの火は落ち、炭火ばかりになってしまった。お供えのお蜜柑が配られ、一年の厄払いしてもらった村人は三々五々家路にいった。

檜の燃える匂いと、村人のざわめき、「六根清浄」と唱える山伏さんのご祈祷の音が奈津子の記憶の底からゆっくりと甦ってきた。それは懐かしく、温かく、ふんわりと彼女を包み込んでくれた。

いつも村はずれのお堂に住んでいる山伏さんは、その当時村人にとって、大切な存在だった。家を新築したり増築するときは、お祓いやご祈祷をしてもらっていた。また毎月朔日になると、白装束に袈裟がけをして、錫杖をジャラジャラ鳴らしながら村の家々をご祈祷して回った。奈津子の家も、神棚の掃除をし、榊を新しくして山伏さんを待っていた。ご祈祷が終わると、祖母がお茶とお菓子をだして出てきた。奈津子はお礼のお米を渡すのが役目だった。彼はそれを袋に詰めながら、「少しは大きくなったかい。

れ、檜の青々とした枝が山のように積み上げられた。父親も行者講に入っていたので、朝早くからお堂に出かけて護摩炊きの準備をしていた。

十二月の第一日曜日だったように思うのだが、当日は吉野の本山から山伏の装束をつけた数人の修験者が参列して、護摩炊きが行われた。日ごろは人影のない加納院の広場に、近くの村々から大勢の村人や、子供たちが集まってきた。綿菓子や生姜糖や岩おこしを売る露店も出て、その日はとても賑わった。子供たちは護摩炊きの時間より早く集まって、村の男性が檜をうす高く積み上げる様子を、結界の縄が張られた外側から眺めていた。やがてお堂から厳めしい装束の山伏が出てきて、積み上げられた檜の前に一列に並び祈祷が始まる。いつもお堂に一人で住んでいる老人も白装束に錫杖を持って、修験者の中に入っていた。

法螺貝の音色が雑木林にこだますと、火のついた矢が護摩木に射られ、点火される。白い煙がもくもくと立ち上り、檜の焼ける匂いがあたりに流れ始めた。ご祈祷が最高潮に達すると、炎が雑木林の樹木よりも高く立ち上っていった。「六根清浄、六根清浄」となえることばと錫杖の音が檜の弾ける音とともに、雑木林に響き渡った。村の家々から願いの事書かれた護摩木が集められて、三方に積み上げられている。修験者は呪文を唱えながら、それを炎の中に次々と投げ込んでいく。護摩木はめりめりと音を立てながら火

しっかり食べてもつと強うならん」と言って、奈津子の頭をなげながら、齒の抜けた口を大きく開けて笑った。

村では病人が出ると、お医者さんの治療を受けながら、その山伏さんにお加持をしてもらうことがよくあった。奈津子は体が弱く、風邪ばかり引いていたので、祖母に連れられて、お堂によくお参りした。

薄暗いお堂の奥の部屋に祭壇があり、恐ろしい顔の木像がお祀りされていた。山伏さんはその前で、錫杖を鳴らしながらお経を唱えお加持をしてくれた。いつもはズボンの上に着る平さんを着ていたが、お加持を始めるときは白い上着に袈裟を首からかけて毅然として見えた。祭壇に灯された蠟燭の炎はお経の音が高揚してくると燃え上がり、まるで息をするように大きく揺らめきはじめる。奈津子は炎をじつと見つめながら、神様がおりてこられたのだと思っ合掌していた。お加持をもらうと、苦痛が和らいで体調がよくなったので、山伏さんは不思議な力を持っている人だと思っていた。祖母は「あのお方は吉野の山で、厳しい修行をなさった方なや。神様のことが分かるんや」と言っていて、いつも畏敬の念を口にしていた。

あれからもう三十年近くも経つが、奈津子は急にあの山伏さんに会いたいと思った。もう亡くなっているとわかっていながらそう思った。するとあのお堂がどうなっ

雪に耐えられるはずもないと思うのだが。できることなら、あの山伏さんのお堂でもう一度お加持をして欲しいとも思った。そして奈津子が抱きしめることもできないまま旅立ってしまった赤ん坊の魂に呼びかけて欲しいと思う。あの山伏さんなら「魂ごひ」の儀式をやってくれそうな気がしてならなかった。

奈津子の耳もとにまた赤ん坊の寂しげな鳴き声が聞こえてきた。鎮守の森の遙か向こうにある墓場に浄土とこの世の境目があるのだと祖母が言っていた。赤ん坊の魂はまだあのあたりをさま迷っているように思えてならなかった。

III

予約している通院の日が近づいてきたので、奈津子は「記録ノート」を清書しはじめた。

二週間の出来事をメモしておいて面談の当日カウンセラーにそのノートを提出することになっている。この二週間は、奈津子にとって大事件が起きていた。実家で療養し始めてから通院以外、家からほとんど出られなかったのが、奈良のお寺へ一人でお参りできたことだ。

今回は以前のように後悔に苦しむ日々を綴るだけでなく、当麻寺にお参りし曼荼羅を拝観できた喜びを書こうと思っただ。お寺の仄かな明かりの中に浮かび上がってくる曼荼羅、

その仏さまのお顔を見つめていると、自分をすっぽりと包み込んでくれる優しさを感じたことを……。また当麻寺の別院で学生時代から敬愛していた折口信夫の小説『死者の書』に出会ったことも。

記録ノートを書いていると、これを提出する聡明なカウンセラーの顔が浮かんできて、「奈津子さんはどうして曼荼羅を見たいと思われたのですか」と聞かれそうなお気がした。奈津子自身もなぜ曼荼羅に惹かれるのか、十分説明できなかった。テレビを見ていた時、当麻寺で女優が曼荼羅についてインタビューしている画面が映っていて、それがとても神々しく見えたからかもしれない。いや描かれている仏さまのお顔に懐かしさのようなものを感じてしまったからだろうか。出産の後、夢の中に出て来た仏さまのお顔を無意識に求めているのだろうか……。

いざ他人に説明しようと思うと、どのように伝えればいいのかことばが浮かんでこなかった。また当麻寺で曼荼羅を拝むことができてから、それを蓮の緞織で織ったという一人の女性・中将姫にも興味を持ち始めていた。

子供を亡くし、絶望のどん底にいる奈津子が曼荼羅に魅せられるように、中将姫も何かに苦しみ、その救いを求めて曼荼羅を織るようになったのだろうか。中将姫が求めていたものを知りたいと思うのだった。

奈津子はそれを折口信夫の書いた『死者の書』から読み取ろうとしていた。小説では折口の構想が加わり、伝説の中將姫を当時貴族であった藤原南家の嬢子「郎女」として展開している。中将姫（郎女）がなぜ当麻寺に向かって、たった一人夜の間に紛れて屋敷を出奔しなければならなかったのか、奈津子はとても興味を感じながら読み進んでいった。

中将姫（郎女）は貴族の家に生まれ、才色に秀でた女性だったようだ。幼い時に母親と死別し、継母に育てられたが折り返いが悪く、命にかかわるいじめを受けたらしい。そんな彼女は幼時期から仏門に憧れを抱いていて、父から贈られた「称讚浄土経」の写経を始めていた。そのようすは神憑りに近く、姫に仕えている人々を心配させていたようだ。夜も侍女たちを寝静まらせてから、油火の下で一心不乱に書き写し、百部は早々に写し終え、その後千部千写の発願をしていた。

写経に明け暮れる彼女が春分の日が来ると、その手を休めて西の空に太陽が沈んでいくのをじっと見つめていた。当時の人々の誰もが彼岸の中日に沈んでいく太陽を拝んでいると、阿弥陀仏と極楽浄土の光景があらわれると信じていたようだ……。

ある日、中将姫（郎女）は西の空に沈んでいく太陽の中に、神々しい阿弥陀仏のお姿を拝むことが出来たのだ。

……西空の棚雲の紫に輝く上で、落日は俄に転ぎだした。

その速さ。雲は炎になった。日は黄金の丸になって、その音も聞こえるか、と思ふほど鋭く廻った。雲の底から立ち昇る青い光の風——、姫はちつと見つめて居た。やがてあらゆる光は薄れて、雲は霽れた。夕闇の上に、目を疑ふほど、鮮やかに見えた山の姿。二上山である。その二つの峰の間に、ありありと莊嚴な人の佛が瞬時顕れて消えた。……

……金色の髪、金色の髪の豊に垂れかゝる片肌は、白々と袒いで美しい肩。ふくよかなお顔は、鼻隆く、眉秀で、夢見るやうにまみを伏せて、あゝ、雲の上に朱の唇、匂ひやかに帆、笑まれると見た……

当時の人々が信じていたという日想観、春分の日、落日の中に阿弥陀仏が浮かび上がり、空一面に極楽浄土の光景が広がって行ったという情景を、中将姫の目を通して、折口は独特のタッチでこのように描いている。

屋敷の奥深くで写経に明け暮れた中将姫が、二上山の峰の間に瞬時まみえることのできた阿弥陀仏の幻影を「金色の豊かな髪がふくよかな片肌脱いだ白い肌垂れかかり、鼻が高く眉はくつきりとして夢見るような瞳を伏せて、微笑まれているお顔」として描写している。これは厳肅な神のイメージと言うよりも、姫が憧れている理想の男性のイメージとさえ取れる。落日の中にまみえることができた阿弥陀仏は、中将姫にとどって厳肅で畏敬の念を抱く神仏と、姫が純粹な心を震わせる憧れの男性のイメージが合体した

存在だったのだろう。

中将姫はお彼岸の中日が来るたびに、その阿弥陀仏さまのお姿にまみえることだけを、願うようになっていった。ところがあいにく降り出した雨で、その日は阿弥陀仏の姿にまみえることが出来なかった。その夜、姫は居ても立っても居られなくなり、いつも阿弥陀仏が現れる二上山の峰に向かって、ただ一人屋敷を出奔したのだった。御伴の者も連れず不案内な山野をただ歩き続けた。そして夜明けに二上山の麓にある当麻寺にやっと辿り着いた。

奈津子は中将姫のいちずな信仰心を思うとき、あまりにも唐突と思われる行動も何となく理解できた。先日お参りした当麻寺の境内を思い浮かべていた。あの日眺めた二上山の峰の間に、阿弥陀仏さまの尊いお姿が浮かび上がるのなら、奈津子も二上山をめざして出奔していたかもしれないと思えてくる。

目をつむると、当麻寺のお堂の薄明かりの中におぼろげに見えた「曼茶羅」の仏さまのお顔が、幾つも浮かんできた。そのお顔は奈津子の心を蝕んでいる懺悔の想いを、どこか遠いところへ、運んで行ってくれるような気がしてきた。

カウンセラーの当日、奈津子はかなり早く到着したが、部屋の前で待っている人はいなかった。今日の奈津子はいつもとより心の余裕があった。

「以前から曼茶羅に興味を持っていましたが、実物を見たことがなかったのです」

奈津子はとても素直にことばが出てきた。

「写真で曼茶羅を見たことがありました。高野山にある弘法大師の描かれた曼茶羅とか……。なぜかとても心が惹かれたのです。いつか本物を見たいと思っていました」

奈津子は幼い日、祖母に連れられて、お寺によくお参りしていた。本堂や納骨堂で、いつも見ていた掛け軸の仏さまが、曼茶羅の絵ととても良く似ているので、懐かしさを感じていたのかもしれない。

「当麻寺の曼茶羅って、すごく大きいんです。驚きました。高さが四メートルもあるそうです。衝立のような厨子というものに納められているんですが、前に立つと圧倒されそうになります」

奈津子は自分の感動をカウンセラーに伝えようと、必死なことばを探した。

「曼茶羅の表面はあまり鮮明に見えないんです。網のようなもの張ってありますし、かなり傷んでいる部分もあります。でも仏さまのお顔がいくつも描いてあることがわかります。阿弥陀如来とか、観音菩薩とか、勢至菩薩が描かれています。でもわたしにはその違いがはっきりわかりません。でもその前に立って仏さまのお顔を見つめると、心が震えてくるのです」

これまでの面談では、亡くした赤ん坊への思いをくどくど話すか、母親失格であると自分を責めたてるばかりだった。しかし今日はいつもと違う話ができそうな気がしていた。

ドアが開き、奈津子が提出した記録ノートを手にしたカウンセラーが笑顔で迎えてくれた。明るい花模様のブラウスにカーデガンを羽織っている奈津子に、

「爽やかな季節になりましたね。今日は素敵なブラウスですね」

と、話しかけてきた。

「はい。奈良に行くとき着て行ったものです」

「そうですか。とてもお似合いですよ。奈良の当麻寺にお参りされたのですね」

ソファーに案内しながら、奈津子を見つめている。

「はい、当麻寺まで曼茶羅を見に行ってきました。どうしても見たかったものだから……」

カウンセラーは、奈津子の記録ノートを開きながら、

「それで曼茶羅をご覧になったのですね」

と話しかけ、奈津子の方を見て微笑んでいた。彼女は曼茶羅について何も尋ねようとはしなかった。

「テレビで、お寺を訪ねて行くシリーズ番組があったようです。なにげなくスイッチを入れると当麻寺を映していたのです。女優さんが、住職と話しているところでした」

「そうだったのですか」

「そうなんですか……」

カウンセラーは奈津子のノートに目を移して、長い間見つめていた。

奈津子は心の中にひたひたと満ちてくる思いをどうすればカウンセラーに伝えられるかそればかりを考えていた。しばらく沈黙が続いた。

「見つめていると、仄かな明かりの中に浮かび上がってくる仏の世界を感じるのです。それは私の心の奥深くにずっと以前から存在していて、私たちを見守って下さっているのだ。そんな気がしてくるのです。懐かしいと言うか、包み込んでもらえる安らぎを……」 奈津子の心の中から、次々と何かが溢れて来た。

「なにかあの曼茶羅を見つめていると、亡くなってしまった赤ん坊が私の心の中に甦ってくるのです。いいえ、その曼茶羅の中に行けるといいな……。そんな気がしてくるのです」

奈津子はそこまで話してから、自分のことばに驚いていた。自分の想いがそのことばの中に秘められていることを初めて知ったのだ。

今まで、大切な分身である赤ん坊が、自分の前から突然消え去ってしまったことの喪失感や虚無感に打ちのめされてしまっていた。しかし今は、赤ん坊が自分の目の前から消え去っていても、なにかにしっかりと受け止めてもらっ

ているのかもしれないと感じられ始めていた。奈津子はそのことに今初めて気づいた。そんな自分の心の変化に驚いていた。

無言で見つめてくれるカウンセラールの前で、奈津子は自分の心の奥深くをじっくりと覗くことができた。

カウンセラールは、まるで奈津子の心の変遷を透視するように、無言だった。

「私は、曼茶羅を拝むと心が安らいでくる理由がなんとなくわかってきたような気がします。昔祖母に教えられた仏さまの世界を、曼茶羅の中に私は見つけることができているような気がします」

「私は、嘆き悲しむよりも、あの赤ん坊が仏さまの世界に行けるようにしてあげなければならぬのではないかって……」

奈津子は自分に言い聞かせるように呟いた。ただ奈津子はその「すべ」がまだ理解できていなかった。

カウンセリングに出かけて疲れているのだが、その夜も寝床に入ってもなかなか寝付けなかった。深夜放送を聞きながらベッドに長い間横たわっていた。頭の中では心療内科の先生のアドバイスや、カウンセラールとの面談の場面がぐるぐる廻っていた。それでもいつの間にか眠っていたようだった。

朝、ラジオ体操のピアノの音で目が覚めた。四時間あまり眠っていたのだ。今日はなぜか心の中に、温かいものが流れているを感じた。

起き上がり窓ぎわまで行ってカーテンを開けた。ひんやりとした冷気が吹き込んできて、心地よい。ここ数日ほうれん草や小松菜の葉っぱが伸びている。鶏はまだケージの中にいるらしく、とても静かだ。いいお天気で朝日が室内まで射しこんできている。振り返ると枕元に何かをくるんだようにタオルが置いてあった。

それを眺めていると、昨夜変な夢を見ていたという記憶が甦ってきた。奈津子は柿のはっぱくらいの茶色い赤ちゃんをガーゼにくるんで持っていた。虫の赤ちゃんだと思っていた。

「その赤ちゃんはまだ生きていますから、タオルでくるんで温めてあげてください。カイロを少し離して置いてあげてください」

奈津子が出産した産婦人科のあの医師が出てきて、そう言った。

「本当に生きていますか」
と、奈津子が尋ねている。

「触れてください。温かくて動いているでしょ」

と、お医者さんは自信ありげに言った。

奈津子が試してみようと思つて手で持ち上げると少し動

く。目や口があることは何とかわかるが、今まで見たこともない変な形をしていて、手も足もついていない。全体が細長い形をしている不思議な赤ん坊だった。虫なのか、昆虫なのか、爬虫類なのか……分からない。人間の赤ちゃんでないことは確かだ。

奈津子は夢の中で、何の違和感もなくその赤ん坊の世話をしていた。ガーゼにくるんで、タオルで捲いてベッドに大切に寝かせていた。奇妙な赤ちゃんの世話ができることが嬉しくてたまらなかった。「生きているんだ」と思うだけで、とても安心できた。

奈津子は枕元のタオルを改めて見ながら、長い間その場に立っていた。どうしてあんな夢を見たのだろう。奈津子の目の前に産婦人科の医師の顔がはつきりと甦ってきた。

できるなら奈津子の赤ん坊に「まだ生きています」と言つてほしかったのに……。と思いつつも、今は、怒りや悔恨ではなく優しい思いがふつふつと湧きあがってきた。

我に返つた奈津子は、整理できない夢の思いをカウンセラールに話さねばならないと思つた。今までも夢の話をすると、カウンセラールは真剣に聞いてくれたし、「夢は心の深層が現れるのですよ。自分でしっかり味わってみることが大事なんです」と話してくれていた。

奈津子は「記録ノート」を持ってきて、ページを開い

た。夢の記憶が消えないうちにメモしようと思い、印象に残っている場面をつぎつぎと書いていった。読み返してみると、自分でもとても不思議な話だと改めて思う。赤ん坊の死を知ってから、乳児を見ることをかたくなに拒否してきたのに、人間でない赤ん坊の面倒をみている夢を見ていたなんて信じられなかった。奈津子はまだ夢と現実のはざまを往還しているような思いが残っていた。ベッドの枕元には、赤ちゃんをくるんで寝かしつけたタオルが今も置かれたままだった。

いつもより今日は早く起きたので、台所で朝食の準備をはじめた。菜園に出ている母親は九時過ぎないと帰つてこない。「朝の空気を吸って畑をすると気持ちがいいよ。一汗かくと御飯もおいしいしね」と言うのが口癖だった。

奈津子は九時すぎまで寝ていることが多かったし、朝食を取らない日もあるので、母親はその時間までたっぷり仕事をしてくるのだ。

冷蔵庫の野菜でサラダを作り、食パンを焼いていると、数か月前まで夫とマンションで暮らしていた日々が鮮明に甦ってきた。夫は今ごろ朝食を食べているだろうか。洗濯や掃除が大変だろう……。奈津子は長い間考えることが出来なかった日常生活を、振り返ることができていた。夫に、近況を知らせるメールを打ち、感謝の気持ちを綴った。

食後、居間のソファーに座つて『死者の書』を開いてみた。

平穏な日々が続いていても奈津子の心は不安定で、いつ鬱状態が襲ってくるか予想がつかなかった。まだ心の奥深くに赤ん坊を亡くしてしまった喪失感が大きく口を開いていて、それを埋めるすべが見つかからないままだった。

しかしどんなに落ち込んでいても、仏像の写真を眺めていると、なんとなく心が和んでくるのは確かだ。仏の姿は何かにすがらないと生きられない奈津子の心の支えになっていた。

思い返してみると奈津子はいつも死の恐怖に脅えていたような記憶がある。学生時代も思春期鬱に悩まされ、それを乗り越えるためにのめり込んでいったのが、折口信夫の世界だったような気もする。

当麻寺で「曼茶羅」を拝観した後、折口信夫の書物を見つけた時、奈津子は何か因縁のようなものを感じてしまった。思春期に腕きつつ探究していた魂の安らぎを、赤ん坊の死によって改めて求めずにはいられなくなっていたのだ。

奈津子は『死者の書』を読み進んでいくうちに、折口信夫が中将姫伝説にかなりの脚色を施していることがわかってきた。中将姫が二上山の峰で幻のようにまみえることができたのは、阿弥陀仏であると同時に、滋賀津彦という皇子の魂が甦った姿でもあったと書いている。彼は中将姫を伝説上の人物としてではなく、一人の人間として描こうと

しているようだ。

当時、当麻寺は女人禁制であったため、中将姫が結界を犯して境内に深く入った罪を贖わなければならなかった。そのため姫は粗末な庵に据え置かれることになった。慣れない庵暮らしの中で、長い間阿弥陀仏の姿を拜むことは出来なかった。

姫が田舎暮らしにも慣れ始めたある夜のことだった。やっと遅い月が顔をだし、谷の響きが聞こえ始めた夜更けになって、つた、つた、つた。狭い庵の中を何時までも歩く足音が聞こえてきた。帳が風を含んだように皺むと、凍る様な冷気が漂い始める。恐怖を感じた中将姫（郎女）は目を瞑っていた。その束の間、姫の睫の間から細い白い指が目に入った。

帷を掴んだ片手の白く光る指。とっさに中将姫は「なも阿弥陀ほとけ。あなたとうと 阿弥陀ほとけ」と唱えた。

中将姫（郎女）が目にしたのは、帳を掴むまるで骨のよう白く光る指だけだった。しかしその手の白い指を見た時から、あれは彼岸の中日、二上山の峰に瞬時顕れたあの阿弥陀仏（佛人）さまなのだ確信していた。しかしその手はその手は古墳から目覚めようとしている王子滋賀津彦（佛）の手でもあることを暗示している。

折口は阿弥陀仏を、姫の崇高な祈りの対象であると同時に

に、謀反を起こして処刑された滋賀津彦の魂がお墓の中から甦り、中将姫（郎女）を希求しているのだという伏線も描きこんでいる。姫の心の中では阿弥陀仏が憧れの佛人と重なっていたのだろうか。

夢かうつつか判然としない意識の中でや々とまみえることができた阿弥陀仏。生まれ育った屋敷を出奔するという苦難のはてに、彼女の目ではつきりと拜むことができた阿弥陀仏。その指が海の渚の白玉のように、ひからびて寂しく感じられ、そのお姿も想像できた。中将姫は、そのやつれ干からびて見えたお姿に「おいとほしい、寒かろうに」と思い、阿弥陀仏の素肌の肩や身体を被うための布を織ろうと思いついたのだ。

中将姫は、阿弥陀仏に自分が生きるすべてをささげ、祈り続ける日々を送っていた。写経と祈りの日々は当麻寺に出奔する以前からの姫の日常であった。当麻寺の粗末な庵の中で謹慎のために不自由な生活を強いられ、憧れの阿弥陀仏に見えることがままならない日が続いたが……二上山の麓の当麻寺に住むことができ、阿弥陀仏にほんの少しでも近づけることができただけで、姫の心は満たされていたのだ。

奈津子はこのままで読み進んで「祈る」という尊いエネルギーを改めて感じてしまうのだった。いや、自分には中将姫（郎女）のようにいちずに祈る対象がないことに改めて

気付いた。心の中は虚無と暗澹とした「死」の恐怖が、ただ蜷局を巻いているばかりだった。

奈津子は成人してから長い間、祈るものを喪失してしまっていた。思春期折口信夫の「魂の呪術的世界」に憧れつつも、古代人が希求していた「祈り」も、日本人が長い間培ってきた「神仏への祈り」も、彼岸の中日の日想観さえも知らないままだった。

奈津子は夕日の中に阿弥陀仏のお姿を拜むことはかなわないかも知れないが……。仏さまに抱かれている赤ん坊の姿を、一目見ることが出来たらと願い始めていた。

IV

「中将姫が憧れの阿弥陀仏の身体を被うために織った布が曼茶羅になっていった」と折口は描いている。奈津子はその子細をつぶさに確かめたくて、今日もソファーに座って『死者の書』のページを繰っていた。開いたところは、中将姫が庵で当麻の姥の語りを聞く場面だった。

ひさかたの 天二上に、

我が登り 見れば、

とぶとりの 明日香

ふる里の 神無備山隠り

家どころ

多に見え、
屋庭は見ゆ。

豊にし

見ゆる家群

弥彼方に

朝臣が宿

藤原の

朝臣が宿

……

……

中将姫が据え置かれた庵で、気が付くと当麻の語部の姥が一人見張りのようについていた。あまり物音をたてなかったで、人のいることさえ姫は忘れていた。

「郎女さま」沈黙を破るように、姥は物寂しい声で話しかけてきた。

「聞いてみる気はおありかえ。お生まれなさらぬ前の世からのことを。それを知った姥でおざるがや」

と、姥は親しみをこめて、昔語りを始めた。中将姫（郎女）の屋敷にも藤原家の昔語りをする姥が居た。姫は人恋しさもあつて、語り始める姥の詞章にじつと耳を傾けていた。しばらくすると、姥の顔はこわばり始め、神憑りに入ららしく、姿態がわなわなと震えだした。

そこまで読み進むと、奈津子の目の前に神憑りになった姥がありありと浮かんできて、まるで自分に語りかけてくるような錯覚をおぼえるのだった。奈津子は近ごろ憑依の場面に不思議な魅力を感じるようになっていた。友人と見に行った夢幻能に、興味を覚えたからだろう。お能では後

シテが昔語りを始めるとき突然形相が変わってしまった、生前の想いをとくとくと述べるシーンが現れてくる。時にはシテが舞い狂い大蛇に変身することさえあった。

意識の深層で突然チャンネルが切り替わったように何か降りてくる。人間の意識の深層にある何かが見れて来るのか、それとも大いなる宇宙の意識が憑依してくるのか……。

語り部の姥の語る詞章は、学生時代「記紀の歌謡」の教科書に載っていたものと酷似している。その詞章も奈津子の心の奥深くに何かを目覚めさせていった。目を瞑れば、教授がその歌謡に独特の抑揚をつけて悠長に歌ってくれた姿が浮かんで来る。歌い終わると、教科書を持ち直して「この歌謡は神話時代の神々の素朴でおおらかな生活が詠まれているのです。古代は自然と人間が強い絆で結ばれていて、豊かな時代だった」と語り始める。古代に思いを馳せ、懐かしむように解説を加える教授の思索は奈津子を虜にしていった。

奈津子はあの頃、卒論の論旨を整理しようと折口の著作を読みあさっていた。「詩の発生」という課題を折口信夫の「国文学の発生」の論文の中から、特に憑依現象から求めようとしていた。

折口の説によると、はるか昔、集落のお祭りの席には海の彼方の「常世」から神が訪れていた。その神は村人を祝

福するために時を定めて訪れており、村人は彼らを「まれびと」と呼んでいた。時代が下がるにつれて、「まれびと」は祭式で村人が扮するようになっていった。翁の面をつけて呪言（聖なる祝詞。村の繁栄と人々を寿いだ詞）を寿ぐのだが、憑依現象により村人は神になりきっていた。

村という共同体の変化とともに、神の寿ぐ呪言の内容も変化して行き、その詞章から演劇や詩や文学が発生していったというものだった。

奈津子は折口の説に陶醉していた。その検証例として挙げられる沖繩の古い神々、ノロやユタの姿に郷愁に似た懐かしさを感じていた。奈津子の生まれ育った田舎の暮らしの中に、その素朴な神の姿が現代も息づいていると思われ、るものを感じたからだ。

神に憑依された人々の混沌とした意識の中に、宇宙の聖なるものが存在するのだと信じ、そこにすべての神の源流があるのだと……。奈津子は青春の鬱から逃れるために、死の向こうにあるもの、命の源流を必死で求めていたのだらう。

そこまで考えた時、今奈津子は折口の思索を「中将姫の曼茶羅」の中にたどれたような気がしはじめていた。中将姫が阿弥陀仏にまみえることができたのは、真摯に祈ることによって、阿弥陀仏に憑依されていたのかもしれない。宇宙の聖なる意識が中将姫に憑依し、姫の織る布に聖なる

曼茶羅が浮かび上がって来たのではないだろうか。

突然、奈津子の目の前に一人の老婆の姿が浮かんできた。姥は不思議な節をつけてご詠歌を誦し続けている。その顔のこわばりや、微妙に震えている姿態が哀愁を帯びていた。いつの間にか奈津子の意識の深層で、語り部の姥はもう一つの媼に繋がっていった。

その媼は、テレビの報道番組「イタコの口寄せ」で見た一人の女性だった。あれは結婚して間もない頃、夫が海外出張で一か月近く家を開けた頃だ。夕食後なげなくチャンネルを回していると、神憑りになって詞章を唱えている老女が画面いっぱい映っていた。七十を超えていると思われる女性が、緋のような紺色の着物の上に白装束をつけ、首から袈裟を掛けていた。二畳足らずの粗末な簡易テントの中に、媼ともう一人の女性が合掌して座っている。

「ここは恐山といって、東北地方の下北半島にある霊場です。私はそのテントの一つの口寄せするイタコの前に来ています」とナレーターが語っていた。まわりは溶岩流が流れた後だろうか、草木がほとんど生えていないごっこつとした岩肌が、はるか彼方まで続いていた。白濁色の岩石の所々からまだ噴煙が立ち上っている。これが地獄の風景なのかもしれないと思われるほど、寒々としていた。

カメラが進むにつれて、その焼けただれた大地がはるか

向こうまで続く中に、小さな石を積み上げただけの小山が幾つも見えてくる。その石の山に鮮やかな赤や黄色で塗られた風車が挿され、一つまた一つと音を立てながら舞っている。道の片隅には小さなお地藏さんが真つ赤な涎掛けをつけて並んでいた。

「子供を亡くした親たちが、供養のために石を積み上げ、お地藏さんを祀ったのでしょか。恐山の所々で悲しい音をたてながら、風車が回り続けています」

「賽の河原に集まりて 親を尋ねてたちめぐり 峰の嵐の音すれば 父かと思ひよじ登り 谷の流れを聞くときは 母かと思ひはせ下り 父上恋し母恋し 恋し恋しと叫べども……」

いつの間にか哀調をおびた幼児和讃が、画面から流れはじめた。

恐山は水子供養として有名な霊場だと語っていた。イタコと呼ばれる唄あいの世に旅立った子供の霊魂を呼び出し、その声を聞かせてくれるとナレーターは語った。

画面に目が不自由だというイタコが大写しになり、簡易テントの中で身体を震わせながら口寄せをしている場面と、その前で一人の中年の女性が目頭を押さえながら、何度もうなずいていた姿がいつまでも映し続けられた。

立てられる気持ちになつてきた。実家に引きこもつてから半年が過ぎようとしている。このままの生活を続けていいのだろうかと考えてしまふのだった。

カウンセリングの日が近づいてくると、その思いは強くなつていった。「記録ノート」を読み返して、二週間の出来事を整理してみた。日常生活ではかなり落ち着きを取り戻していて、悔恨の想いに打ちのめされソファーに蹲っている時間は減りつつあった。また夕食の準備も、母の手伝い程度ならができる日が多くなつてきていた。

しかし魂の抜け殻のようになつた奈津子は生きることに自信が持てないままだった。何をしても気力が湧いてこず、ふと気が付くと赤ん坊のことを考えていた。何のために私は生き続けるのだろうか。生きねばならないのだろうか。と自問してしまうのだった。あのマンションに戻り意味のない日々を送ることも、夫と平凡な日常を繰り返すことにも自信が持てなかった。まして仕事に復帰して慌ただしい雑用で翻弄される日々は、もう御免だと心が拒否していた。

ただ曼茶羅や魂に対する思いだけは強くなり、それを探し求めることでもかろうじて心の平衡を保つことができた。明日のカウンセリングでは、奈津子の今の心境を語るしかない心に決めた。

朝、いつもより早く目を覚まし、前裁せんざいに出てみると冷気が肌をさした。まだ木枯らし一号は吹いていないが、昨晩

奈津子はそこまで回想すると、いたたまれなくなつて立ち上がった。息苦しい記憶と、赤ん坊を亡くしてしまった悔恨に、またもや押しつぶされそうになつてきた。紅茶を入れて気分を落ち着かせようと台所に立ったが、目の前にイタコの姿が浮かんできて、涙が溢れてくる。いつのまにか口寄せに聞き入っていた女性に奈津子が同化してしまつていた。もしイタコが本当に子供の霊魂を呼び寄せてくれるのなら、奈津子も赤ん坊の声を聞きたいと切実に思われてくる。せめて泣き声だけでも……。彼女は神憑りの女性に憧れ、すがりつきたい思いに駆られていた。

気持ちを整理しようと、ソファーにもどって『死者の書』を開いた。そして何枚か掲載されている阿弥陀仏の写真をじつと見つめ続けた。そのふくよかなお顔に懐かしさが込みあげてきて、また涙が頬をつたつた。奈津子の赤ん坊がこの阿弥陀仏さまに抱かれていれたいのに……。と思われてくる。

アールグレイの香りのきつい紅茶をストレートで飲みながら、ソファーに座り続けた。

V

十二月に入るとテレビは師走の町の慌ただしい様子を映し始めた。駅前広場や、商店街のアーケードには眩いばかりのクリスマスツリーが飾られている。奈津子も何となく追

の冷え込みは相当厳しかったようだ。さすがの母もまだ菜園には出ていなかった。奈津子は勇気を奮い起こして、温かい牛乳とパンで簡単に朝食を済ませ、病院に行く準備をした。玄関で見送ってくれる母親は「寒いから気を付けなさいね」と言いながら心配顔だった。電車を乗り継ぎ駅から五分ばかり歩いていると、全身が温まつてきたが、足取りは重かった。この前のカウンセリングの日より自信がなく、予約の時間ぎりぎりに待合室に入った。

時間になるとドアが開き、「寒くなりましたね、風邪は大丈夫ですか」と、微笑みながら奈津子を案内してくれた。今日はカウンセルルームに暖房が入っている。いつもはあまり飾り気のない部屋だが、ポインセチアの鉢が窓際に置かれていて、そのコーナーがほのかに輝いて見えた。

カウンセラーは奈津子のノートを膝の上で開きながら、「どのように過ごされましたか？ 体調はいかがですか」と尋ねた後、

「虫のような赤ちゃんを育てている夢をご覧になったのですね」

と、話し始めた。

「ええ、不思議な姿をした赤ちゃんを、その時とても大切に思っていました。いろいろ考えたのですが、小学校の二年生の頃、友達がカブトムシの幼虫を幾つも持っていて、その何匹かをもらって、育てたことがあるのです。夢の中

でその時の記憶が甦ってきていたようにも思うのです」

うか。そうではなくて、その喜びを受け入れる心が衰弱してしまっているのかもしれないとも思うのだった。

「奈津子さんの心の中に変化が起きているのだと思います。幼虫の赤ちゃんへの思いをゆっくり味わってください」

「私は今何をどうしているのかわからないんです。やらねばならないことが何もなくて、虚脱状態になっています」

と穏やかに見つめながら語りかけてきた。しかしその虫のような赤ちゃんの記憶が薄らいでしまっていて、今の奈津子はあの夢のことがほとんど思い出せなくなっていた。

自分の心を奮い立たせてここまでやって訴えた。確かに近頃、赤ん坊を失った悲しみや後悔の思いは薄らいできていたが、奈津子の心は空しさで虚脱感でがんじがらめになっていった。その心の内をカウンセラーにどう話せばよかったらいいのか、困惑していた。

「目が覚めると、虫のような赤ちゃんはいませんし……」

沈滞した雰囲気あたりを被っていった。

奈津子は今の心境をどのように伝えればいいのか困惑していた。

そのとき奈津子は、数日前鮮明に甦ってきて彼女の心を虜にしている「イタコの口寄せ」のことを話してみようと思いついた。それを話しても奈津子の「虚無感」を解消できるとは思わなかったが、自分の心の中を話すことによつて、カウンセラーに何かが伝わるのではないかと思つた。

「考えてみると、あの不思議な赤ちゃんを育てている夢、とても新鮮でした。自分でも信じられない出来事でした。あの日から、亡くした子供のことを考えてソファーに蹲っていることが少なくなつていった気がするのです」

「先生、以前テレビで見たことがあるのですが……、イタコの口寄せの場面が思い出されてくるのです。『イタコ』の哀調をおびた語りの様子が、鮮明に甦ってきて……。私も、イタコの口寄せをしてもらえるのなら、やりたいと思いついてはいます」

思い返してみると、当麻寺の曼荼羅を拝むことができ、その時感じた安らぎがああ夢につながつたのではと思われ

「それが迷信だと言われても、それでもいいのです。私が赤ん坊に会いたいと思つていることを何かで表したいのです」

てくる。

「でも子供の頃味わつたカブト虫の赤ん坊を育てる喜びは、もう得られないような気がしています。赤ん坊を亡くしてしまつた心の傷を癒す方法が見つからないのです」

奈津子はそう答えた後、自分でもわからなくなつていた。あの夢は何だつたのだろう。

「それが迷信だと言われても、それでもいいのです。私が赤ん坊に会いたいと思つていることを何かで表したいのです」

命を育むことの喜びを奈津子は放棄してしまつたのだらうに言つてもらえるとは思つていなかったもので、安堵と同時に大変なことを言つてしまつたという思いが心の中を駆け巡つた。

話しているるとつい興奮してしまい、以前「魂ごひ」をやつてほしいと真剣に思つていた心境が戻つてきて、声が震えだした。

もし奈津子がイタコに口寄せをしてもらうことが出来ても、未熟児で生まれた赤ん坊が何を語れるのだろうか。また口寄せが行われているのは青森県にある「恐山」という所らしい。そこまでどのようにして行けばいいのか、奈津子が一人で行けるのか、何もかもが不安になつてきた。奈津子はそこまで考えてくると、口を閉じたまま長い間考え込んでしまつた。

カウンセラーは、奈津子を無言のまましばらく見つめていたが、目を伏せながら、

カウンセラーはまた沈黙が流れた。奈津子の戸惑いを、理解してくれたのだろうか。カウンセラーは静かに「記録ノート」に目を落としていた。

「赤ちゃんを亡くしてしまつた悲しみ、自分の不注意で生まれることが出来なかつた赤ちゃんに許してもらいたいというお気持ち、私にもよくわかります。」

不安と戸惑いに黙つたままの奈津子の目の前に、村のお墓の入り口に安置されている六地藏の姿が浮かんできた。恐山のお地藏さんの物悲しい姿を思い出していたので、その姿が浮かんできたのかも知れない。

と、つぶやいた。しばらくカウンセラールームに沈黙が続いた。

村の墓地は護摩焚きの行われる加納院の近くで、奈津子の実家から木々が鬱蒼と茂る山の中を一キロばかり歩いたところにあつた。人里離れた異境で、車の音も生活の騒音もまったく聞こえてこなかつた。雑木林から吹き下ろす風が木々をざわざわと鳴らし、カラスの鳴き声が一日中聞こえていた。

「奈津子さんの想いを、赤ちゃんに伝えるために、イタコの口寄せをしたいと思われれること、いいことだと思ひます。思つていることをやってみることが大切なんです。自分の気持ち大切にしてください」

突然カウンセラーは、奈津子を見つめながら優しく語りかけてきた。

奈津子はそのことばに、一瞬戸惑つてしまつた。そのよ

墓地の入り口に安置されている六地藏は明治よりずっと昔、村が開拓された時代に作られたのだと言われている。それから長い間、この村に生まれ、亡くなっていった人々を見つめ続けてきたのだろう。その顔は摩耗してしまい目鼻立ちがほとんどわからなかった。

村では早産や流産で亡くなった子供たちのお墓を作らないので、このお地藏さんがお墓になるのだと祖母に教えてもらったことがあった。子供を亡くした母親たちがお供えするのだろうか、お地藏さんはいつも真つ赤な涎掛けよだれかけを付けていた。

墓地にはお彼岸やお盆のお参り以外に、村人がほとんど出かけることのない場所だった。しかし念仏講のお祖母さんたちにとっては地藏盆という大切な行事があった。八月の二十三日になると講の人々が朝から集まってお地藏さんの周りの草を刈り、お線香やお花を挙げて準備をした。奠座まげざを敷き詰めた六地藏の前には、村人がお供えしたお菓子の箱や、お煎餅の缶がうず高く積まれ、その前でおばあさんたちは長い御詠歌を唱えた。

念仏講のおばあさんたちが昼食を終えたころ、村の子供たちがお接待をもらいに集まってきた。墓地は突然子供たちの歓声と墓石の間を走り回る小学生の歓声に包まれた。

お接待が一段落し、お菓子をもらった子供たちが帰り始めるころ、雑木林は夕日に照らされ、ツクツクボウシの声

あの日、奈津子は河原をさ迷っている夢を見ていた。足もとをひたひたと水が流れている。ザーという音に振り返ると、すぐ後ろを川が流れていた。水量は多くないが、かなり激しい流れだ。……どこかで赤ん坊の泣き声が出ている。弱々しい泣き声は、だんだんか細くなり、虫の息のようでもそれでも泣き続けている。……そうだ私の赤ちゃんのだと気付いた奈津子は立ちあがり、ふらふらしながら泣き声のするあたりを探しまわった。すぐそばで泣き声が聞こえるのに、どんなに手さぐりで探しても見つからない。

その時、突然薄暗い霧のかかった地面に光がさしてきて、奈津子の目の前に赤ん坊の顔が浮かび上がってきた。生まれたばかりの赤みを帯びた肌色が、紫色にかわりつつあった。目、鼻、顎が見え、ふるえている。奈津子が手をさし伸べようとすると、川底のあたりから突然白い霧が湧き出してきて赤ん坊の顔がだんだん消えていった。

あの日奈津子は水の流れる音を聞きながら、必死に何かを探していた。薄暗い河原で霧に包まれながら、奈津子は亡くなってしまった赤ん坊を探していたのだ。茶毘にふされてしまった赤ん坊がこの世に存在するはずはないのに……。奈津子は無意識に赤ん坊の「魂」を捜し求めていたのではないだろうかと思えてきた。肉体を抜け出した赤ん坊の魂が河原をさ迷っていたのだ。

あそこは河原だった。あれが三途の川だったのかもしれない。

が森一带に木霊していった。三々五々山道を歩いて帰る子供たちは、歌を歌ったり、ふざけ合ったりしながら遠足のように並んで歩いた。一緒に帰っている祖母に、お地藏さんのお話をしてもらったこともあった。笠地藏や、子供を事故から守ったお地藏さんの話だった。

祖母は最後に「お地藏さんはな、子供たちを守ってくたさるありがたい仏さんなんやで。あの世に行くときも、お地藏さんに助けてもらうて行くんや。お地藏さんは子供の守り神なんや。困ったときはいつでもお願いするとええんや。助けてくれはる」と、真剣な顔をして話してくれた。

奈津子の目の前にあの祖母の顔が、赤い涎掛けをつけた六地藏さんの姿とともに、ありありと浮かんできた。

奈津子は、突然カウンセラーを見つめながら語り始めた。「先生、イタコに口寄せしてもらおう前に、私は村の六地藏さんにお参りしてみようと思います。今その地藏さんが目の前に浮かんで来るのです」

カウンセラーは何も言わないで頷いていた。

帰宅後、奈津子は疲れ果ててソファでうたた寝をしてしまった。母が準備してくれた昼食もほとんど手を付けず、紅茶を少し飲みながら、今日のカウンセリングの様子を思い出していた。するとなぜか赤ん坊の死を夫から知らされた夜のことが鮮明に思い出されてくるのだった。

ない。奈津子はとうとう赤ん坊を抱きしめてやること出来なかった。あの微かな鳴き声を挙げていた赤ん坊は、いや赤ん坊の魂はどこへ行ってしまったのだろう。お地藏さんに守られて三途の川を無事渡ることが出来たのだろうか？

そこまで考えると、あの夜の河原の情景が懐かしさと悔恨の想いを伴って、ありありと甦ってきた。そして奈津子が一番大切なことを忘れていたことに気付くのだった。「お地藏さんにお参りしなければならなかった」のだと。

居ても立っても居られなくなった奈津子は、夕食の準備をしている母親のところに行き、「六地藏さんの涎掛けを作ろうと思うの。赤い布、家にないかしら」と突然言い出した。奈津子の思いつめた表情を見て、「どうしたんだね。急に何を言い出すんだね」と戸惑っていたが、母親は料理を中断して、奥の間の座敷に上がって行った。しばらくすると、仕立て直すために取っておいたという着物の赤い裏地を持ってきてくれた。「何枚作るんや。これだけあればようさん出来ると思うけど」と言いながら。

さらさらした赤い布を手に取りながら、これが奈津子の想いを叶えてくれる涎掛けになるのだと思うと、胸が熱くなってきた。インターネットで作り方を検索し、一日掛かりで六つの涎掛けを縫い上げた。奈津子はそれを縫うことが、亡くなった赤ん坊への最大の懺悔なのだと思いはじめた。

次の日、朝早く起き、六地藏さんにお参りして漣掛けをお供えしようと、わくわくしていた。ところがその日は朝から霏^{あられ}まじりの小雨が降りだした。雨具を準備して奈津子が出かけようとしていると、

「奈津子。お地藏さんにお参りするのかい？ お花をお供えして線香も用意しないと……」

と言いながら、母親も雨合羽を着ながら、いろいろ準備を始めた。奈津子一人で墓地に行かせるのは心配らしい。結局、掃除用の鎌と熊手や、庭に咲いている寒菊を持って、付いてきてくれた。

枯草の中に埋もれている六地藏は、幼いころ地藏盆のお接待をもらいに来ていたお地藏さんとかなり違っていた。摩耗したお顔が、ひととき小さくなったような気がした。墓地は恐山の「イタコ」の風景を思い起こさせるほど寒々として見えた。

奈津子が墓地に着いてしばらくすると、雨も上がり薄日が射してきた。母親は茶色く枯れた六地藏の周りの草を鎌で刈り取り、集めて燃やし始めた。谷間に降りて水を汲んできて、寒菊をお供えし、線香に火をつけていた。その間奈津子は自分が精魂込めて縫った真っ赤な漣掛けを一体ずつ丁寧に掛けて行った。カラスの啼き声が雑木林のあちらこちらから木霊してきて、異界に來たような不思議な気持ちになっていた。

漣掛けを掛け、お花を供えたお地藏さんは、見違えるほど輝いて見えた。奈津子は懐かしさとも、安らぎともつかない穏やかな心境に包まれながら、母親の唱える般若心經を一緒に唱えた。線香の匂いは、何時の間にか奈津子を当麻寺の曼茶羅の前へ導いてくれていた。

奈津子の祈りは赤ん坊に届いただろうか、赤ん坊の迷える魂はお地藏さんに導かれて、あの曼茶羅の世界に行けるだろうか。カラスの啼き声を聞きながら奈津子は何時までも合掌していた。

奈津子はその日から、お地藏さんにお参りすることが、日課になっていった。朝食を食べると、身支度をして一口の道を日参し続けた。寒さに頬がひりひり痛み、強風に雑木林がごうごうと唸っている。霏交じりの雨が降りしきる中でも、奈津子はお地藏さんにお参りすることが喜びだった。いつの間にかお参りすることが、亡くした赤ん坊に会いに行くことになっていった。奈津子はお地藏さんに、自分の想いをせつせつと語りかけた。懺悔の想いも、毎日の出来事の報告も……。また一度も与えることが出来なかつた食べ物もオモチャもお供えした。

三月に入ると、日ごとに寒さが和らぎはじめた。雑木林の生き物たちも一斉に活動を開始したようだ。鶯の鳴き声がある日突然雑木林から木霊^{こだま}してきたとき、奈津子は思わ

ず「あつ、鶯！」と叫んでしまった。

お地藏さんの周りの枯葉を掃き集め、お花をお供えしている間、すぐそばの檜^{ひのき}の木にいろいろな種類の小鳥たちが入れ代わり立ち代わりやって来てさえずり続けた。落ち葉の下から、雑草の若芽がよつきり顔を出して、その瑞々しい緑を見ていると奈津子は急に胸がいっぱいになってきた。生き物たちの躍動を感じていると、がんじがらめに縛られていた「空しさと虚脱感」の重い鎖が、ふと緩んでいくような気がした。お参りが終わっても、柔らかな日差しを浴びながら、しばらくその場に佇んでいた。爽やかな風が頬をよぎり、線香の煙が墓地に向かってゆつくりと流れていった。

その時いつか読んだ詩の一節が甦^{よみがえ}ってきた。「森は土と樹々を抱えて 沈黙しつつ 生きている 人は その森に帰る 森は ひとつの大きな闇であり 慈悲である 人はそこに帰る」山尾三省の詩だ。

樹木に覆われた村の墓地は、太陽の光をあびて小鳥も虫も樹木も雑草も、すべてが生き生きと躍動し始めていた。森羅万象の内に宿っている精霊が目覚め、活動し始めていくようだった。

森は傷ついた人間の心をそっと包み込んでくれる「ひとつの大きな闇である 慈悲である 人はその森に帰る」……このフレーズが、今の奈津子の心の奥深くに浸透して

いった。

奈津子の赤ん坊の魂もこの森に帰って来て、六地藏のふところに優しく抱きしめられているような気がして来た。

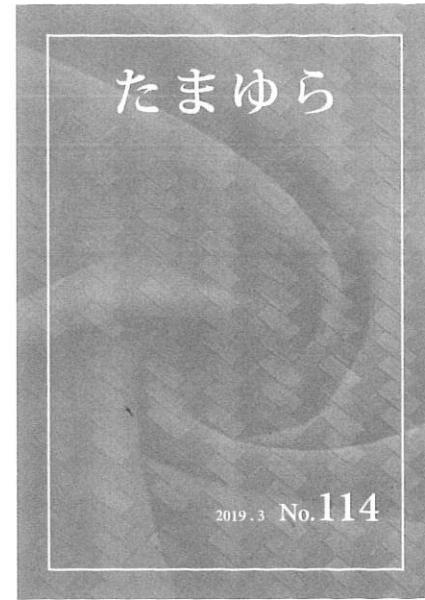
お地藏さんにお参りした午後は、『死者の書』を開いて、中将姫が曼茶羅を描く章を何度も読み続けた。奈津子がお地藏さんに祈り続けているからだろうか、不思議なほど中将姫の心が素直に読みとれるようになっていた。いや奈津子は中将姫に同化してしまっていたのかもしれない。

「蓮の糸で織りあげた布に、当麻寺の楼閣伽藍を描きはじめた時、その布に見る見るうちに数千地涌の菩薩の姿が浮き出て来た」と折口信夫は描いている。それが「当麻曼茶羅」であると。そのページを開くと、奈津子の目の前に、数千地涌の菩薩の姿が浮き出てくるのが見えるような気がした。

奈津子は今年の五月十四日の当麻寺の練供養には必ずお参りしよう、中将姫の「御来迎」をこの目で見つめようと思ふのだった。



桑山靖子
くわやま やすこ
1943 神戸市生まれ
武庫川女子大学 国文学科卒業
32年間 神戸市立中学校国語教師を務める
2006 大阪文学学校に入学
同人誌「たまゆら」「あべの文学」の同人となる
2011『能面』上梓



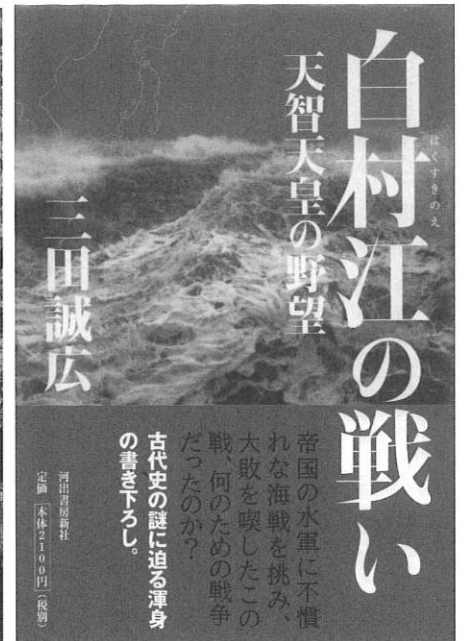
たまゆら 京都府

百号を超えた『たまゆら』

「たまゆら」という語句は「玉響」と万葉集にも記載されている雅語で、珠玉が触れ合い、一瞬かすかな音を発すること、の意である。小誌命名の折「はかなくもささやかに」と人生そのものに重ね合わせながら、多分この雑誌もそうなるだろうと予感していた。

ところが、令和二年四月時点で第一一七号にまで達したのである。その原動力といえば、いうまでもなく私の文学熱であり、まとめた冊子を世に遺そうとする執念に他ならない。そこに至るまで幾つかの節目とか契機があった。私が二十代で同人誌『関西文学』に入会したこと、そこに拠る有力同人を誘って『半獣神』を創刊したこと、平成元年に毎日新聞社を繰り上げ定年退職した後、大阪文学学校の講師に就いたことなどが挙げられる。

当初は摂津市で読書会や文章教室を開き、程なく会員の短文を集めて、平成二年に小冊子『たまゆら』を発刊した。かくして種子は播かれたのである。時経て節目節目で、少なからぬ文学愛好者と出会い、次々と同人が加わり、また



自費出版賞受賞



去っていった。今回受賞された桑山靖子さんも大阪文学学校で知り合った一人である。『たまゆら』を主宰しながら、同校の講師を十年、文芸誌『樹林』の同人誌評子を十一年、大阪芸術大学の講師を三年務めて勇退した。
私は結婚後の家庭事情で摂津市から高槻市へ、更に東近江市へと転居を重ね、その間も営々として『たまゆら』の発行に努力すること三十年近く、何かと曲折があり、辛苦のほど、エピソードの数々など筆舌に尽くせるものではない。
『たまゆら』のモットーとして簡潔に「より高く より楽しく」を標榜した。小説が中心だとしても、雑誌というからには五目飯、幕の内弁当の旨味がなければと常日頃から唱えていたので、随想や思索的色彩の濃いエッセイ、評論、詩、俳句、短歌、戯曲などあらゆるジャンルを受け入れていく。

現有同人の内訳は創作同人、購読同人、特別購読同人併せて二八名、切磋琢磨の好機となる合評会は欠かさず、私は第一一四号まで季刊で主宰、それ以降は京都の中川一之さんが年三回発行で編集代表を務めている。本号に転載された桑山靖子さんの「当麻曼陀羅」は、私の主宰役最後の第一一四号に発表された力作である。彼女とは前述した通り大阪文学学校時代に接点をもっていて、彼女は古典文学や芸能を素材とした作品の多い中長篇派、著書に「能面」



合評会にて同人メンバーと

(鳥影社刊)がある。

なお、同人の文学活動でつけ加えるなら、有志それぞれに単行本上梓がある他、榊原隆介さんの「内田百閒文学賞」、杉本増生さんの「関西文学賞」「神戸エルマール文学賞」、私はかつて『文學界』『すばる』『季刊文科』に作品を発表したことがあり、「北日本文学賞」(選者・井上靖)「神戸エルマール文学賞」を受賞した。

同人誌の世界にも高齢化の波が押し寄せている。それには知的遊戯の側面があるにせよ、やはり文学樹の根となっているのは明らかであり、活字文化が衰えれば文化は廃ると強調しておきたい。その点、『文芸思潮』は私たちにとっては得がたい応援軍、私も平成二十三年に第八回「銀華文学賞」佳作を頂いた御縁があり、今回の桑山さんの快挙を得て、ますますその感を深くした。

ドストエフスキーは長篇「未成年」の中で「人間というものには実に複雑な機械で、ときとすると何が何やらわけのわからぬことがある」と記している。まことにその通りなのだ、さればこそ例えば純文学なら、人間という未開の密林へ、未知の巨峰へ新機軸の文体で挑もうとするわけである。そこに途方もないむずかしさと、えもいわれぬ面白さがひそんでいるといえよう。私如きはそれらの麓でうろつくばかりだけれども、いつも痛感するのは、私にとって自作を活字にするという行為は他に代えがたい生甲斐、達

成感が得られるということだ。それでいて同時に、「言葉というものは何と不完全なのだろう。それ故に言葉を探せ、但し書き急ぐな」という自戒の念は忘れたくない。ちなみに、私がお気に入りの章句の中に、ガストン・バシユラーの「文学的イメージは新たな夢幻性で豊かにされなければならぬ」とか、開高健の「文章はメリ、ハリ、テリ、ツヤの四つ」などがある。

現代社会に孤立化と平準化、敢えて言えば映像化も進みつつある。時あたかもコロナ戦争が生起した。この人類共通の敵に対して、今こそ万国が一致団結して世界平和への糸口を見出すべきではないかと思う。せめて私に出来ることはと問いかけてみて、小誌に「同人誌寸評」の連載を決定した。これからは珠玉の才を探る旅、創作者にエールを送る旅を続けるだろう。

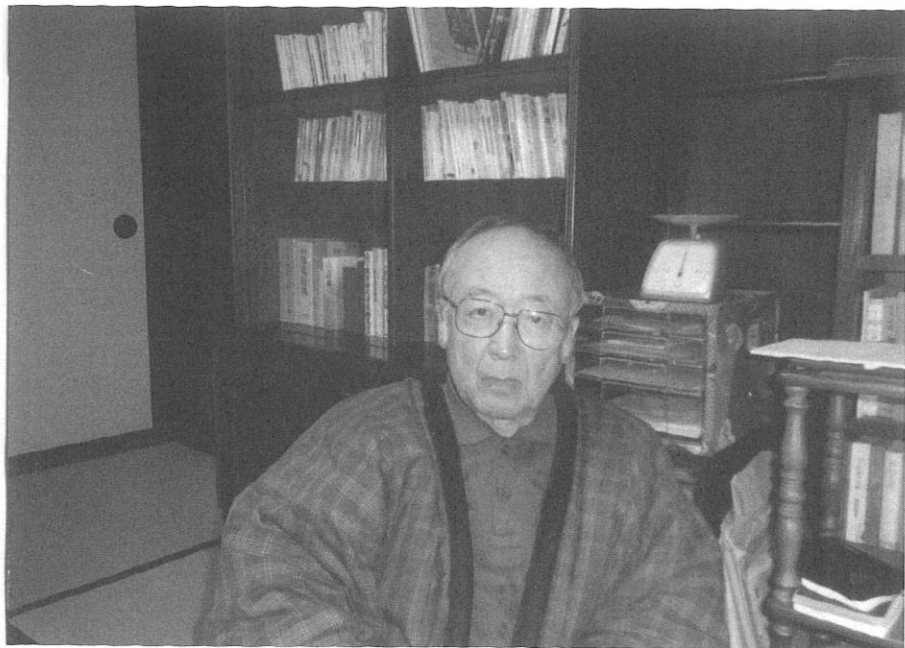
(前主宰/佐々木国広)

たまゆら 新代表・中川一之
〒612・8358

京都市伏見区西尼崎町八九〇・二 中川方

電話 075・622・3448

Mail = abbeyroadkaz@gmail.com



書齋の佐々木国広前主宰